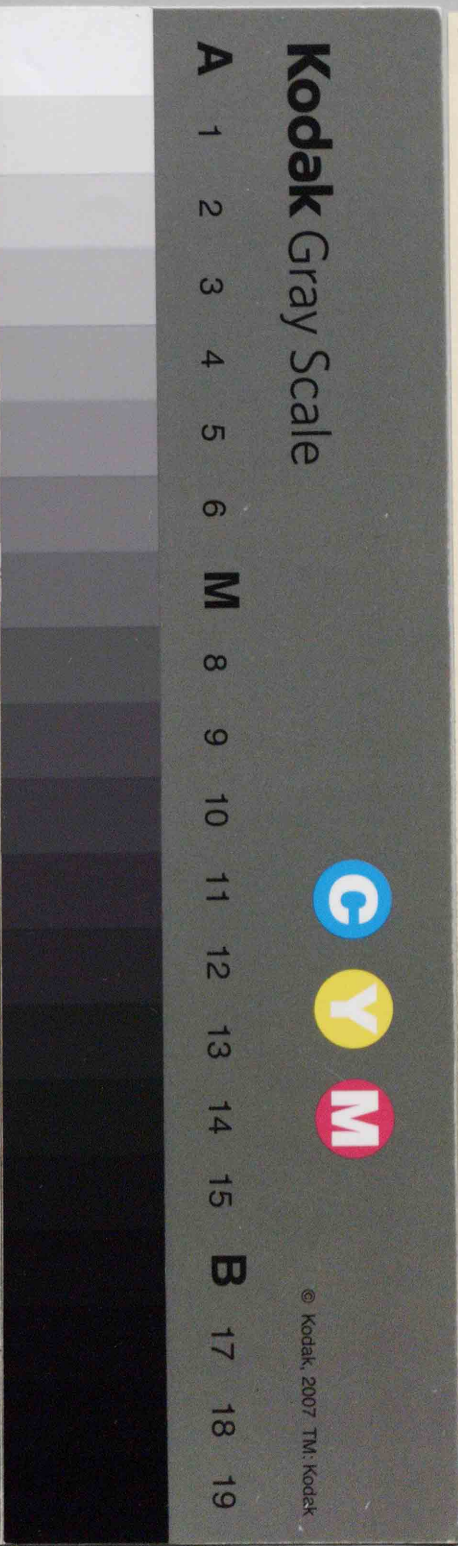
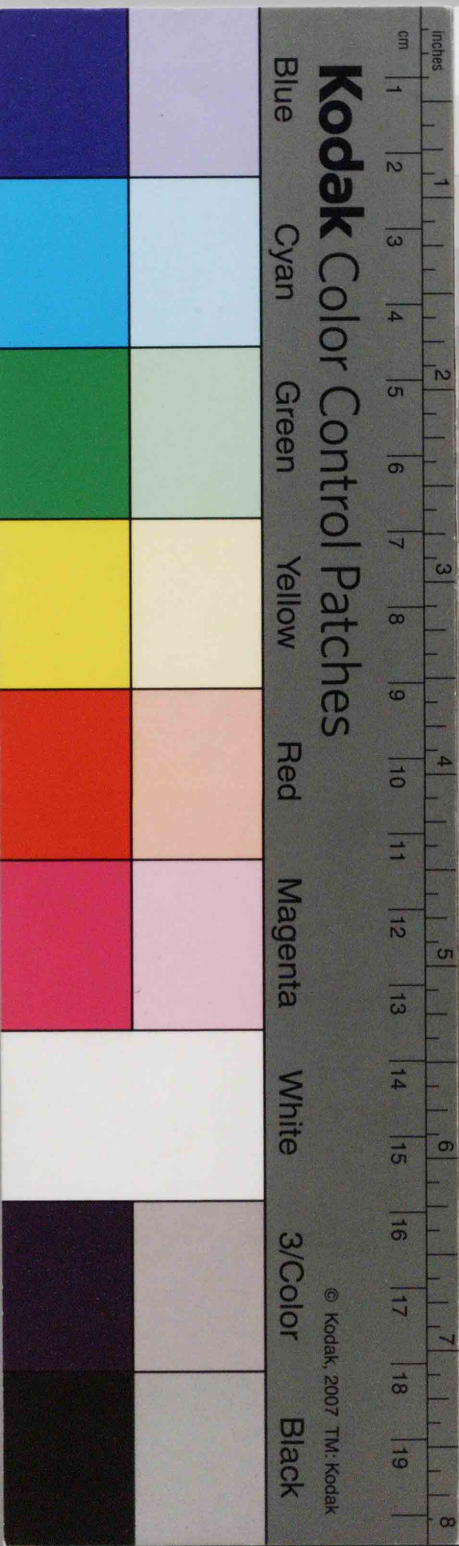


新定
中等國語讀本

森合直文編
森林太郎補
荻野由之
卷三

375.9
Oc 8
資料室



41483
教科書文庫
4
810
41-1921
20000
50949



新定
中等國語讀本卷三目次

一、○ 忠君愛國……………	一
二、○ 國風と家風……………	八
三、○ 御階の櫻(和歌)……………	二二
四、○ 伊勢忠敬の晩學その一……………	一六
五、○ 伊能忠敬の晩學その二……………	二〇
六、三秀院和尚に答ふ……………	二五
七、接木……………	二七
八、○ 生存競争……………	三〇

目次



九、日本海の家戦その一……………三六

一〇、日本海の家戦その二……………四四

一一、産土神と氏神……………五〇

一二、境遇(格言)……………五六

一三、レシソグの比喩譚……………五八

一四、植物の景觀と氣象との關係……………六〇

一五、池野大雅……………六八

一六、驟雨浴……………七三

一七、夏の夜(新體詩)……………八一

一八、洋學の由來……………八三

一九、眞淵と宣長……………八八

二〇、吾輩は猫である……………九七

二一、邦人の常識……………一〇三

二二、新聞紙……………一〇九

二三、ボアソナード氏を送る詞……………一一七

二四、事業の選擇につきて(書簡文)……………一二一

二五、農人形……………一二五

二六、宇宙の富……………一三〇

二七、滿洲の風俗……………一三五

二八、蘇武(新體詩)……………一四〇

二九、大宮人と武士その一……………一四六

三〇、大宮人と武士その二……………一五二

三一、殊勝なる武者振……………一五五

三二、膽力の養成……………一六〇

三三、人の諫……………一六七

三四、大森閑語……………一七二

卷三目次終

新定中等國語讀本卷三

一、忠君愛國

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を佩びて居る、男爵ジールボルト氏の演説を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は、西洋各國の革命は、國王に對する不滿から起つて、その結果は、いつも、王室が權威を縮小し、或は、全く顛覆するものであるが、日本のは、こ

Siebold ジーボルト
 聽いて
 (聽きて)

れに反して、政變毎に、皇室の稜威を益し、繁榮を増進する」といふ意味であつた。これは、如何にも、よく、わが國體の、萬國に異なつたことを言明したものといはねばならぬ。

かの大化改新といひ、明治維新といふ、政治上の二大變動は、わが國なればこそ、極めて容易に成就して、雨降つて、地かたまるといふ結果が得られたのである。新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた時、制度改正の詔敕が、一度煥發すれば、祖先以來の領土、領民もさし出し、既得、將來の權も、悉く打ち棄て

大化改新

孝徳天皇の大化二年に行は

る。氏族分權の制を改めて

朝廷集權となすにありき。

明治維新

明治天皇の明治元年、政權を皇室に復し給へり。

て、唯唯諾諾として、大命を承るといふことは、決して、外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ、わが國民は、萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴つて、進歩したのである。かういふ場合には、外國では、必ず、國王と人民との衝突を免れぬ。一旦、人民と衝突すれば、國王が、散散な目に遭はせられた例は、枚擧に、暇が無い。國外へ出奔する位は、愚なこと、遂には、刑場に引き出され、斷頭臺上の露と消え、るといふ、英國、佛國の歴史などは、日本人の目からは、殆ど信ぜられぬ沙汰であつて、小學から、中學にはひ

天之命云云
易の革の卦の
辭。

二十五朝
夏、殷、周、東
周、秦、漢、東
漢、蜀、漢、晉、
東晉、宋、齊、
梁、陳、隋、唐、
後梁、後唐、後
晉、後漢、後
周、宋、南宋、
元、明。

つて、始めて、外國の歴史を學ぶものは、何人も、必ず、外
國史に、慘酷無道の事が多いのに驚くに、相違ない。
元來、革命といふ語は、天之命革、而四時成、といふ語
から出たので、支那人は、昔から、天子は、天の命を受け
て、百姓を治めるものだといふ思想を根本として居
る。それ故、聖人、賢者たる以上は、誰が代つて、天子にな
つても構はぬのである。これが爲に、歴代二十五朝、長
い朝廷でも、三百年とは續かぬ。その時には、天の命が
革つたものと覺悟して、平氣で、新しい天子を戴いて
ゐる。かういふ國國には、決して、大化の改新や、明治の

維新のやうな改革が行はれる筈はない。イギリスの
貴族は、今でも、大きな領地をもつて居る。ドイツのも、
さうである。日本國民の、皇室に對する考は、古今、東西、
全く、類例が無いのである。

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起
つて、もしくは、權力を以て、もしくは、輿望により、遂に、
帝王の位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正
せば、同等の國民である。これが、諸外國民の、王室に對
する考であらう。日本人は、皇室をば、われわれ國民と
は、一種別なものとして見て居る。支那には、王侯將相寧有

王侯將相云
云
秦の陳涉の
語。

王侯將相寧有
陳涉の語

大日本史
三百九十七
卷、神武天皇
より後小松天
皇までの歴
史、徳川先関
の編纂。
源義朝
（一七八三年
一八三〇年
源義仲
（一八一四年
一八四四年）

種」といふ語があるが、日本人は、帝王といふ位は、國民の、決して、覬覦すべきものでないと、誰も教へはしな
いが、祖先以來、さう考へて居る。長い歴史の中には、皇
家に、弓を挽いた者も無いでは無いが、天子の位をね
らふやうな考は、決して無い。大日本史には、源義朝や、
源義仲が、叛臣傳に入れてある。これは、天子に向つて、
敵對した事の、大義名分を正したので、これ等の人は、
別に、深い考のあつた謀叛人では無い。いづれも、皇室
の寵を失つた悔しまぎれに、手向した亂暴人に過ぎ
ぬ。多くは、朝廷の或官位を得たいと思ひながら、それ

平將門
（一六〇〇
年）

弓削道鏡
（一四三二
年）

なつて
（なりて）

が得られぬ爲に、騷動を起して、我儘を通さうといふ
輩で、叛臣と雖も、朝廷の尊さを忘れぬものである。平
將門も、檢非違使になれなかつた爲に謀叛したので
ある。唯一人、弓削道鏡といふ坊主が、佛法、王法を一つ
にして、自分が、その位に坐らうといふ、不届な了簡を
起したが、忠誠な臣民の聲は、八幡の神託となつて、忽
ち、これを排斥した。その外には、一人も無い。藤原氏が、
廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を、
皇位に即かせたいといふ慾望で、これが、即ち、人間と
しての最大慾望であつた。その慾望さへ達すれば、

この世をば
の歌
藤原道長の
作。
道長は世に御
堂關白と稱
す。その女三
帝一院の配と
なる。(一六二
六年—一六八
七年)

この世をば、わが世とぞおもふ、望月の、かけたるこ
とも、なしとおもへば。
といつて、大満足したのである。(芳賀矢一「國民性十論」)

二、國風と家風

封建時代において、僅に、一川を隔て、一山を離れ
ても、その人情、風俗、頓に相反するものありき。今日の
歐洲に於いては、列國の國境、犬牙相交れど、一たび、境
を越ゆれば、卒然として、別國の感を起し來る。英佛兩
國が、ドーヴァーの海峡を隔つるのみにて、大は、國家

Dover
ドーヴァー
英佛間の海
峽幅二二哩

の政體より、小は、一家生活の状態に至るまで、相同じ
からざるが如きは、固より怪しむに足らざるなり。

およそ、國風は、その國の歴史によりて、自ら出で來
りたるものにして、一朝一夕に成りたるものにあら
ず。されば、國風は國風として、これを識認するの外あ
るべからず。他國の風を見て、濫に、これを羨望したり
とて、不自然なる模倣は、到底永續すべきものならず。
寧、各、その立脚地を明にし、善きものは、これを發達せ
しめ、善からざるものは、これを矯正するに若かざる
なり。

家風も亦、かくの如し。家は、一箇の小國なり。いづれの家にも、自ら、その家風なきはあらず。而して、その家風は、概ね、祖先より傳はれるものにして、一家の遺産として、これより重要なるものあるべからず。たとひ、新興の家にて、家あれば人あり、人あれば祖先あり。その源に溯り來れば、おのづから、一片の歴史なきこと能はず。歴史の流るる所、これ、家風の生ずる所なり。人、國風の重んずべきことを解せば、家風の重んずべきも、亦、これを解せざるべからず。しかも、動もすれば、眼中、家なく、唯、當座の成行に任せて、傳家の遺風を

悉く蹂躪し去り、徒に、新様を誇りて満足する者あるは、抑、何の心ぞや。家風なき家庭は、旅舎と、何ぞ擇ばん。否、旅舎ならば旅舎として、なほ忍ぶを得べし。家庭を以て、旅舎と爲すに至りては、乾燥無味も、また甚しからずや。

國にも、新國あり、家にも、新家あり。新家可ならざるに非ず、ただ、新家たりとも、それ相應の家風は扶植し、たく思ふなり。ましてや、舊家に於いて、その祖先より、連綿として相續し來りたる家風は、苟も、事に、害なき限、これを保存し、その善且美なるものは、特に、これを

尊重し、その子弟も亦、この家風を守りて、家聲を失墜せざることを期せざるべからず。吾人は、源平時代の勇士等が、自ら、祖先何某の後胤と名告りて、戰場に馳驅せしを見、そぞろに、その心根のゆかしきを懷はざる能はざるなり。(徳富蘇峯)

三、御階の櫻

孝明天皇御製

御階の櫻、まはれもの、ふ九重の

御階の櫻、まはれもの、ふ九重の

まはれもの

平野國臣

大君よぎげまはれもの、おご命、
今こそする時を来ませ。

平野國臣筆蹟

平野國臣筆蹟

久阪通武

くたびも、まはれもの、大君の、
清言よまをば、清言よまをば。

損三樹二郎
浮ぶものむらふ姿あがそせども
よろづよおなごらうり日記

梅田雲濱

あが代をおもふ心のひとをたに
あつめあつめと思をざりたるを

吉田松陰

親おもふころにまゐる親がう

けふのやぶらぎ何とまゐらむ

徳川齊昭

今よりはころはむらに花をこむ

ゆめをこむつら鐘をきくゆめ

佐久間象山

らうさう、真弓つぎら、はあれど

ふのほら、らよ、物あめや

白王統綿綿寝衣長久の音
と咲くくてもよの舞の音
中と知れ

高山九彦郎筆

高山九郎

梓、木、花、葉、の、色、は、
根、木、の、色、と、同、く、す

忠を人としてしめしむるを、

おれみこゝろの、かゝるうけし。

僧 月 照

大君のたえよ、何、からむ、

さよの瀬戸ふ、身もあづむとも。

四、伊能忠敬の晩學その一

忠敬、年十八にして、伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして、家を、その子景敬に譲るまで、自ら抑へて、平平凡凡の人となり、一意専心、ただ伊能家の衰へたるを

忠敬
東河と號す。
下總國武射郡
小堤村神保氏
の子。二四〇
五年—二四八
一年。

興し、おのが任務を、最も圓滿に、最も麗しく果さんことを期し居たりき。



伊能忠敬肖像

およそ、才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一舉手、一投足の勞をも吝み、單に、己が欲することのみ、身を委ねんとするは、免れがたき習なり。たとひ、己が欲せざることなりとも、甘んじて、わが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その人、啻に、才氣あるのみならず、また、徳量

甘んじて
(甘くして)

ある人といふべきなり。

世に、才氣ある人は多し、才氣ありて、徳量ある人は少し。年少くして、才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の、肉薄きが如し。物を截ることは、よくすべし、折るる恐は免るべからず。されば、世の、奇才を抱きながら、成功を見ずして、中途に、事を廢する例は、數へも盡しがたし。忠敬が、算數、曆術の學を嗜み、且、これをよくすべき資を抱きながら、自ら、甘んじて、市井の凡人に伍し、伊能氏を繼ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし」といふを、唯一の望として、三十餘年、一日の如く、ひたすら、家

業に丹誠したるが如きは、實に、その徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ。景敬は、家を繼ぎぬ。一家の事、また、憂ふべきものなし。忠敬が、伊能家に對する義務は、ここにおいて、圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は、はじめ、閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより、忠敬の自由に用ゐることを得べし。この時は、忠敬、年、既に五十歳、常人にありては、もはや、老境に入るべき時なり。されど、心の壯なる人には、何歳の時も、

前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試みるに足るべきなり。忠敬は、常人が、世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、はじめ、學に就き、而して、後、漸く、世に出てんとせり。後の、爲すあらんと欲する者、苟も、眞に爲すあらんと欲せば、青年、空しく過ぎて、身の、將に老いんとするを歎ずることなかれ。

五、伊能忠敬の晩學その二

佐原
下總國香取郡

さるほどに、忠敬は、その郷里佐原を出でて、江戸に

曆法改正
寛政九年に成
る。寛政曆と
稱す。
高橋作左衛
門
名は至時。(二
四二四年—二
四六四年)

來り、寓を、深川に定めて、一學生となれり。年こそ老いたれ、實に、一學生となれるなり。尋常一様の、笈を負ひて、郷關を出て、都門に遊びて、師を尋ぬる書生と異なるところは、唯、その、若きと、老いたるとの差のみ。かくて、忠敬は、身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し、信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから、幕府には、曆法改正の舉ありて、これがため、特に、大阪より、高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は東岡と號して、算數、曆象の學に精し。忠敬、急ぎ、東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に、師弟

強ひて

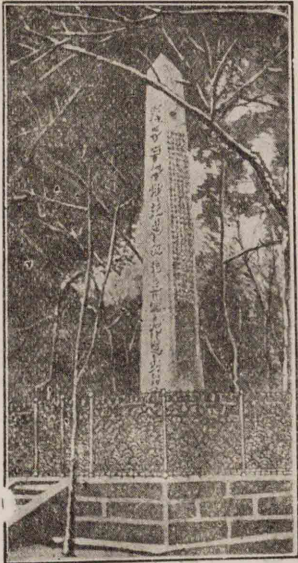
五十以上
如強

の契を結びぬ。時に、忠敬は五十歳にして、東岡は三十
二歳なりき。普通の人情にては、おのれより、年若き人
に會ひては、たとひ、おのれが學業など、その人に及ば
ずとも、なほ、強ひて、自ら高ぶり、あへて、頭を下げざる
が習なれども、徳量ある忠敬は、流石に、さる事なく、喜
びて、その門下生となれり。然れども、同門の學生等は、
師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるを
ば、屢、笑柄となしたりといふ。

晩學のかたきは、實に、いつの世にありても、かかる
嘲笑の存するが爲なり。ここを以て、非凡の士にあら

抱いて
(抱きて)

ずば、大抵、自ら恥ぢて、師に就き、學を修むる勇氣を失
ひ、終に、空しく、志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。元
來、老いて學ぶは、たまたま、その志の淺からざるを顯



伊能忠敬遺功表

すに足るのみ。また、何の
不可かあらん。況や、また、
何の恥づべきところか
あらん。思ふに、區區たる

群小の嘲笑も、忠敬においては、ただ、蛙鳴、蟬噪を聞く
が如くなりしならん。かかれば、忠敬と同門生との優
劣勝敗は、比較するまでもなく、明なることなり。忠敬

の學術は、さながら堤防の決潰して、洪水のおし寄するが如き勢を以て、歩を進め、終に、その學の蘊奥を窮めて、東岡門下に、肩を比すべきものなきに至れり。

かくて、忠敬が、はじめて、幕府より、測量の命を蒙り、その、修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に、五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人は、暮齡用ゐるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は、氣力旺盛、さながら、壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色、滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて、勇往直前、險阻に

測量の命を蒙る
寛政十二年、
はじめて北陸道、および蝦夷地測量の命を受く。

屈せず、風濤に辟易せず、遂に、その志すところを完成したりしは、一に、この、元氣勃勃として、燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるに由れるなり。誰か、日本人を、早熟、早老の人種なりといふ。これ、豈、我に、伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。(幸田露伴)

六、三秀院和尚に答ふ

歳首に、法札下され、恭しく拜誦仕り候。歌は、今に稽古仕り候へども、元より不才のうへ、老後の所作に御座候故、すこしも埒明き申さず。

古今
古今集のこ
と。醍醐天皇
の世の勅撰歌
集。二十卷。

元來、八十一歳の時、古今千遍歌萬首と申す願を
立て候うて、千遍讀は、二年かかりて相濟み、一萬
首は、去年拵へしまひ申し候ひき。小兒の戲と同
前なる和歌に御座候故、詠むとは申し難く、拵へ
候と申し候。何を致しても、老人は、役に立ち申さ
ず、必ず必ず、御年寄らるまじく候。かなづかひ、御
大事の書物、御貸し下されしを、寫ししまひ候う
て、去年さし上げ申し候ひき。御受け取り下され
しこととは存じ奉り候へども、尊書に、その事相
見え申さず候に付、御尋ね申し上げ候。

この外、申し上げたき事、山山にて候へども、省略
仕り候。只、御なつかしう存じ奉り候情意、御察し
下さるべく候。頓首。(雨森芳洲)

中興文
七、接木

谷中
東京市下谷區
にあり。

谷中の里に、何がしの院とて、一つの眞言寺あり。翁
幼き時、その住僧を知りて、屢寺に行きつつ、木の實を
拾ひなどして遊びしが、住僧、かたへの人に向ひて、前
住の事を語るを聞きけるに、寛永の頃、將軍家、谷中わ
たり、御鷹狩のありしに、御徒步にて、此處彼處御過ぎ

將軍家
三代將軍家光
(二二六四年、
二三二一年)

がてに、御覽ましましけるが、この寺へも、圖らず立ち寄られけり。折節、その時の住僧は、や、八旬に及びて、庭に出でて、自ら接木して居けるが、御伴の人人はおくられて、御側には、二人三人扈從せるのみなりければ、さる貴き御事とは思ひよらず、そのまま背き居たるを、「坊主、何事するぞ」と仰せられければ、老僧、心に、怪しと思ひて、いとはしたなく、接木するよ」と御答申しければ、御笑ありて、老僧が年にて、今、接木したりとも、その木の大きくなるまでの命も知り難し。それに、さ様に、心を盡すこと不用なるぞ」と、上意ありければ、老僧、御

誰か

身は、誰人なれば、かく心なき事をいひ給ふぞ。よく思ひて見給へ。今、この樹ども接ぎておきなば、後住の代に至りて、いづれも、大きく生ひ立つべし。然らば、林も茂り、寺も、奥ゆかしくなりなん。我は、寺の爲を思ひてすることなり。あながちに、人一代に限るべきことかは、といひけるを聞かれて、老僧が申すこそ、實にも理なれ」と感ぜられけり。その程に、御伴の人人、おひおひ來りつつ、御紋の物ども、多くつどひければ、老僧、それに心得て、大いに懼れて、奥へ遁げ入りけるを、召し出されて、物など賜ひけるとぞ。

死して朽ち
ず
左傳に「古人
有言、死而不
朽」

今は翁も、この接木せし老僧のごとく、古い朽ちぬれども、ある限は、舊學をきはめ、人にも傳へ、書にもこのして、後世に至りて、正學の開くる端にもなり、この道の爲に、萬一の助ともならば、翁、死すとも、猶生けるが如くならん。古人の、死して朽ちずといひしこそ思ひあたり侍れ。(室鳩巢 駿臺雜話)

八、生存競争

地球上には、動植物各種をして、自由に増加せしむべき餘地は、少しもない。そこに、動植物の各種が、遠慮

なしに、多數の子を産むのであるから、互の間に、劇しい競争の起るのは、見易い道理ではあるが、その有様を、詳しく論ずるには、まづ、諸生物の生活する有様から考へてかからねばならぬ。

植物なしには、草食動物は生きて居られぬ。他の動物なしには、肉食動物は生きて居られぬ。草食動物を飼ふ人は、初より、毎日、若干の草を、犠牲に供するつもりでなければならず、又、肉食動物を飼ふ人は、初より、日日、若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。これらのものが、相竝んで、互に犯さず、共に生存して行く

かいて
(かきて)

といふことは、到底出来ぬことである。
又、長閑な春の日に、野外に散歩して見ると、草木の、
青青と茂り、花の、美しく咲いてをる處に、蝶が、面白さ
うに飛び廻り、小鳥が、楽しさうに歌つてをる。詩人は、
これを、詩に作り、畫家は、これを、繪にかいて、共に、この
世の樂しさを賞め讃へるが、それは、極めて皮相な感
じて、少し丁寧に考へて見る時は、世の中は、決して、か
う無事平穩なものではない。鳥が、かう歌つてをられ
るのは、今日までに、數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、
歌ひながらも、なほ、蟲の命を取らうと探してをる。又、

支那の或王
様が云云
この事、説苑
正諫篇に出
づ。

蝶が、かう舞つてをられるのも、幼蟲の頃に、澤山の菜
類を食ひ枯した結果である。而して、彼處の樹の枝に
は、蝶を捕へて食はうと、蜘蛛が、巧に、網を張つて待つ
てをるし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて食はう
と、鷹が、鋭い目を見張つて、狙つてをるから、蝶の命も、
小鳥の命も、殆ど、風前の燈の如く、一つ油断すれば、忽
ち食ひ殺されてしまふ故、なかなか、氣樂に遊んでば
かりはをられぬ。昔、支那の或王様が、鄰國を取らうと
して、兵を起した時、一人賢明な臣下が、お諫して、御苑
の内に、榆の木がありますが、一つの蟬が、その梢に、高

くとまつて、いい聲で歌つては、露を飲み飲みして、一向、螳螂が、うしろで覗つて居るのを知りません、螳螂も、亦、蟬にばかり、氣を取られて、うしろで、黄雀が覗つて居るのを知りません、私は、又、彈で、その黄雀を打たうとして、露が、著物を濡らすのを知りませんでしたと申し上げたといふ話がある。これは、全く譬喩には違ないが、實際、動植物は、總べて、かやうに相殺し、相食ひ合つて、自然界の平均を保つてをるのである。

かかる所へ、年年歳歳、動植物の各種が、夥しく、子を産むのであるから、その多數は、無論、他の動物の爲に、

餌として食ひ殺され、生き残るものも、餌を得る爲に、甚しく相争はなければならぬ。動植物の増加力は、實際無限であるが、それは、代代産れる子が、悉く生存し、繁殖するものと假定した上のことで、現在の如く、いつ、産れる側から、他の動物に、その大部分を食はれてしまふ場合には、もとより、著しい増加の出来る筈がない。なほ、その上に、一地方における、各種の動物の食物の總量には、常に、制限があつて、生き残つたものが、皆食ふことは、到底出来ぬ。假に、兎が、一疋居るのを、犬が、二疋で見附けたとしたならば、先に、兎を捕へた

犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も、食ふ爲の競争は免れぬ。又、兎の、二疋居る所へ、犬が、一疋來れば、速く逃げた兎は生き残り、遅い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬ爲の競争も、避けることが出來ぬ。動植物ともに、各自、皆、食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争してをるのが、實際の状態で、これを生存競争といふのである。(丘淺治郎「進化論講話」)

九、日本海^の海戦^{その一}

五月二十七日
八日
明治三十八年
のなり。

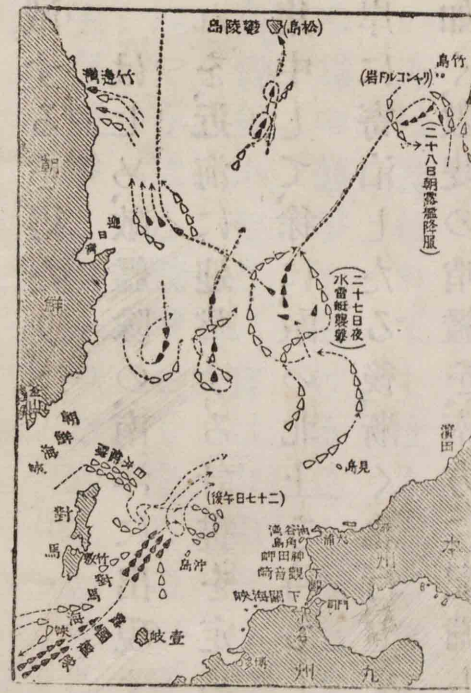
朝鮮海峽
九州と朝鮮と
の間の海峽。

天佑に依り、わが聯合艦隊は、五月二十七日、八日、敵の第二、第三艦隊と、日本海に戦うて、遂に、殆ど、これを撃滅するを得たり。

はじめ、敵艦隊の、南洋に出現するや、上命に基き、これを、近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峽に、全力を集中して、徐に、敵の北上を待ちしが、敵は、一時、安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く、數隻の哨艦を、南方に配備し、各隊は、一切の戦備を整へ、直に出動し得る姿勢を持したり。

果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線

電信は、敵艦見ゆ。東水道に向ふものの如しと警報せり。全軍踊躍、直に、對敵行動を開始せり。



午前七時、哨艦和泉、亦、敵の、北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷戦隊、續いて、出羽戦隊も、午前十時、十一時の交、壹

片岡艦隊
中將片岡七郎の率ゐたるもの。
東郷戦隊
少將東郷正路の率ゐたるもの。
出羽戦隊
中將出羽重遠の率ゐたるもの。

敵情を電報せしかば、海上、濛氣ふかく、展望、五海里以外に及ばざりしこの日も、數十海里を隔てたる敵影、恰も、眼中にうつれるが如く、既に、敵の戦隊は、その第二、第三艦隊の全力なること、その陣形は、二列縦陣にして、その主力は、右翼の先頭に立ち、その他の艦船、約七隻は、その後尾に續けること、その速度は、約十二ノットにして、なほ、北東に航進せること等を知り、本職は、これにより、わが主力を以て、午後二時ごろ、沖の島附近に、敵を迎へ、まづ、その左翼の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。

ノット
海里の稱、
一ノットは
我が約十七
町。

迎へ。

瓜生戰隊
中將瓜生外吉
の率ゐたるも
の。

午後一時三十分、主力艦隊、装甲巡洋艦隊、瓜生戰隊、各驅逐隊、および、出羽、東郷戰隊等、前後して來り會し、暫時にして、正に、わが左舷にあたる南方數海里に、敵影を發見せり。ここにおいて、戰鬪開始の令を下し、わが全艦隊に對し、

「皇國の興廢、この一戰に在り。各員、一層奮勵努力せよ。」

との信號旗を掲げたり。而して、主戰艦隊は、斜に、敵の先頭を壓迫し、装甲巡洋艦、これにつづき、他の諸戰隊は、いづれも南下して、敵の後尾を衝けり。これ、わが豫

定戰策なり。

敵は、わが壓迫を避けて、稍、右舷に、舵を轉じ、ここに、砲火を開始せり。我は、暫く、これに耐へて、距離、六千メートルに近づくにおよび、猛烈に、敵の左右の先頭艦に、砲火を集中せり。敵は、これが爲に、益、東南に壓迫せらるるものの如く、自然に、不規則なる單縱陣となり、われと竝航の姿勢をとれるが、わが全隊の砲火は、距離の短縮とともに、益著き効果をあらはし、その左翼の先頭艦オスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて、大火災を起し、旗艦クニヤージ、スワロフ、二番艦

（つぎへ）

アレクサンドル三世も、また、大火災に罹り、相ついで、戦列を離れければ、敵の陣形、いよいよ亂れ、他の諸艦、また、火災に罹れるもの多く、炎煙、西風に襲きて、忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に、全く、敵影を包みぬ。これ、午後二時四十五分にして、彼我の勝敗は、既に、この間に決したるなり。

我は、煙霧のうち、敵影を發見する毎に、緩に、これを砲撃しつつ、敵の前路に出でたれば、敵は、俄に變針して、北方に、遁走を試みんとせり。我は、急に、その前路を扼して、再び、南方に壓迫し、猛射しつれば、敵の諸艦

千早
通報艦なり。

廣瀬

中佐、名は順太郎。

鈴木

中佐、名は貫太郎。

鬱陵島
朝鮮竹邊灣内にあり。

は、多大なる損害を受けて、頗る、混亂を極めぬ。この間に、壯烈なる事蹟として、特記すべきは、千早、および、廣瀬、鈴木の兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し、二回まで、勇敢なる水雷攻撃を決行したることなり。かくて、我は、洋上に彷徨離散せる殘敵を、縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時夕陽、すでに春き、わが驅逐隊、水雷艇隊は、漸次に、敵に逼れるを以て、主戦艦隊は、日没と共にひきあげ、同時に、本職は、全軍北航して、明朝、鬱陵島に集合すべし」と傳令せしめ、ここに、當日の晝戦を結了せり。

一〇、日本海の海戦その二

この日、朝來、南西の強風、浪を揚ぐることに高く、夕刻に至りて、風、やや和ぎたれども、浪、なほ靜らず。洋中の水雷攻撃は、不利尠からざれど、各驅逐隊、および艇隊は、この千歳一遇の時機を失せんを恐れ、皆、風濤を冒して、日没前に來り會し、各、先を争うて、敵の周圍に蝟集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して、激烈なる攻撃を加へつ。敵は、探照砲火を以て、極力防戦したるが、遂に、わが攻撃に耐へず、僚艦相失して、四分五裂

争うて
(争ひて)

の状態となり、各、一方の血路を覓めんとしたれば、わが追撃のために、一場の大混戦を現出し、少くも、敵艦三隻は、この間に、わが水雷に罹りて、全く、その戦闘、航行力を失ひぬ。後日、捕虜の言を聞くに、當夜、水雷攻撃の猛烈なりしは、殆ど、言語に絶し、左右、應接に遑なく、かつ、その距離、あまり、近き爲に、備砲、俯角の度を過ぎ、て、照準する能はざりきといふ。

二十八日、黎明、濛氣拭へるが如し。既に、鬱陵島附近にありたる、わが艦隊は、はやくも、東方にあたり、艦隊の煤煙、數條あるを發見せり。これ、問はずして、殘敵の

露國 第三 東洋艦隊

艦種	艦名	噸數	艦種	艦名	噸數
戰艦	スワロフ	三五六	巡洋艦	オレグ	四六四五
同	亞歷山三世	三五六	同	スウェートラナ	四七二七
同	アリヨール	三五六	同	ゼムチユイグ	四一〇三
同	ポロヂノ	三五六	同	アルマーズ	四三八〇
同	オスラビヤ	二六七四	同	イズムルード	四一〇三
同	シツイベリキ	一四〇〇	海防	アブラキシ	四二二六
同	ナワリー	二二六〇	同	ウシヤーク	四二二六
同	ニコライ一世	九九九四	同	セニヤブキン	四九六〇
裝甲巡洋艦	モノマフ	五五九三	<small>◎この他驅逐艦九、假裝巡洋艦一、特務船六、病院船二隻、(備考)●は撃沈、○は捕獲、△は逃走、◎は逃走後沈没の符</small>		

ネボガトフ Nebogotoff

丹後

岩見

主力たるや明なり。即ち、三方より、これを包圍す。もとより、敗餘の敵艦、已に、多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるるや、須臾にして、白旗を掲げ、敵艦司令官ネボガトフ少將は、その戦艦四隻を擧げて、部下と共に、降

意を表しぬ。本職は、特に、將校以上に、帶劔を許して、これを受けたり。

驅逐艦漣、陽炎は、鬱陵島附近において、敵の驅逐艦



東郷平八郎肖像

二隻の遁走し來れるを發見し、極力、これに追及して、戦闘を開始したるに、その後續艦は、遂に、白旗を掲げぬ。これ、ピエードウイにし

て、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、および、その幕僚の移乗し居るを知り、その乗員と共に、こ

Rozhestvensky
ロゼストウ
エンスキー
（二五〇八
年）
（二五〇八
年）

れを捕虜となせり。聯合艦隊の大部が、北方追撃の戦果を収むるに汲汲たるに、南方前日の戦場においても、亦相應なる殘獲ありて、敵艦數隻を撃滅したり。抑、日本海を通過せんとせし敵艦隊は、約三十八隻にして、わが撃滅、或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦、および特務艦、各數隻に過ぎず。この二日間の戦鬪において、わが失ひたるものは、水雷艇三隻のみ。その他、多少の損害を蒙りたるものあれども、一として、今後の役務に、支障あるものなし。この大戦における敵の兵力、われと、大差あるにあ

らず、敵の將卒も、また、その祖國の爲に、極力奮闘したるを認む。しかも、わが聯合艦隊が、よく、勝を制して、奇績を收め得たるものは、一に、
天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより、人爲の能くすべきにあらず。殊に、わが軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に、敵に對して、勇戦したりし麾下將卒も、皆、この成果を見るに及びて、唯感激して、そのいふところを知らざるものの如し。
(東郷聯合艦隊司令長官公報による)

一一、産土神と氏神

家が集つて、村をなし、郷をなす。そこには、村社、郷社がある。ちやうど、一家の中に、神棚があると同じである。その神社を中心として、家家の祖先が和樂し、團結したやうに、代代の子孫が和樂團結して行く。或は、高い岡の上に、或は、よく耕された田圃の間に、こんもりとした松杉などの木立に包まれたお宮が、それである。茂つた森の端に、鳥居が見え、石燈籠の見える景色は、外國には、決して見られない、我が國特殊の景色で、これが、我が國特殊の歴史と國體とを語つてゐる

樂

ものである。

かういふ神社が、産土の社である。子が生まれて、お宮參をするのは、この郷土の一家に、新しい小國民が生まれたことを、産土神にお知らせするのである。産土神は、郷土の守護神である。豊かな秋の實のりの後では、この守護神の境内や、その附近に、宮相撲の行はれることもあり、村芝居の催されることもあつて、娯樂の中心地ともなる。神代の昔、天の岩戸の前で、神神達が、神樂を催されたやうに、村人は、ここに集つて、お祭をするのである。大人も子供も、一所になつて樂むの

ね

舞

である。

都會の大きな神社の祭には、昔は、大抵、御輿をかつぎ廻つたり、花山車を曳き出して、大層な賑であつたが、今は、電線が、縦横にかかつて居つたり、電車が、東西に走つたりすることも、一つの原因で、さういふ事はやめになつたが、町内の一家に、金屏風を立てまはして、昔の花山車の人形を飾り、軒毎に、提灯をつるし、町内の子供が、樽御輿を擔いで遊ぶなどといふことは、今の東京などにも遺つて居る。神社の境内、神樂殿では、里神樂を奏することも多い。この日、家家では、赤飯

を焚いたりして、祝ふのである。

産土神と氏神とは別である。氏神は、同じ氏の人人の尊崇した神である。これは、家が、段段大きくなつて、分家の分家、又、その分家が出来るやうになつて、一族が多くなつて來たので、祖先を同じうする者が、共同に祭つた神である。家の中の神棚を、更に大きくしたやうなものである。一例をいへば、藤原氏の氏神は、大和國の春日神社で、遠つ祖の天兒屋根命を祭つて居るのである。源氏の氏神は八幡神社であるが、これは、頼義、義家が尊崇し、義家は、八幡神社の社前で、元服を

春日神社
奈良市春日野
町にあり。
八幡神社
山城國乙訓
郡八幡町男山
にあり。應神
天皇を主神と
す。

頼義
源氏。頼信の
子。鎮守府將
軍。(一七三
四年)

義家
頼義の子。武
勇の譽高し。
(一七〇一年
一七六八年)

4 生 地
2 代 地
VPE A O D
B / DT

して、八幡太郎義家と名のつた程であるから、源氏では、代代、氏神とすることとなつたのである。いふまでも無く、家を重んじ、祖先を尊ぶ風から起つたのである。今日では、各市町村の住民は、本籍の人はもとより、寄留民でも、その居住所の神社を産土神として尊崇し、さうして、その氏子となるので、産土神は、氏神と同じやうになつた。

郷土の神、氏の神、いづれも、祖先に、關係、縁故があつて、子孫から見れば、なつかしい親みがある。郷土の人は、これを中心として、團結する。郷土の平和をみだす者があり、氏の名を汚す者があれば、自ら、その郷土から逐はれ、その氏から斥けられたのは、ちやうど、一家から勘當せられるのと同じであつた。

郷土を離れ、遠方に出た者の、常に忘れることの出來ないのは、産土の社である。海外に出征した兵士の夢に入つたのも、なつかしい産土神の森であつたらう。ひとり山田を守つた父老たちも、日々、この産土神に祈つて、あつばれ、國家の爲に盡せと願つたのである。戦死者の爲に、記念碑の建てられた場所も、産土神の境内が多い。戦役記念品の置かれたのも、ここであ

ひとり山田
を守つた
明治天皇御製
「子らは皆い
くさの庭にい
では、翁や
ひとり山田も
らむ」

る。明治天皇の御大患と聞いて、東京市民は、二重橋の外にひれふして、御快癒を祈念したが、地方の人人は、皆、産土神の境内に集つて祈願した。今上陛下の御大禮を遙拜したのも、ここである。(芳賀矢一「國民道德教科書」)

一二、境 遇

境遇カ、ワレ、境遇ヲ作ル。(ナボレオン)

奮闘セザレバ、勝利ナシ。(シヨペンハウエル)

○生命ノ存スル間ハ、ソコニ、望アリ。(キケロ)

河深ケレバ、流靜ナリ。(シエクスピヤ)

吠ユル犬ハ、眠レル獅子ヨリモ、遙ニ有用ナルコト

アリ。(アトヴィング)

勝ハ、己ニ克ツヨリ大ナルハナシ。(プラト)

數多ノ事件ヲナスベキ捷徑ハ、一時ニ、唯、一事件ヲ

ノミナスニアリ。(リチャード、セシル)

徳ハ、猶、貴重ナル香料ノゴトシ。或ハ碎カルル時、最

モ多ク、芳香ヲ放ツ。(メーコン)

怠惰ハ、猶、鏽ノゴトシ。使用セザル鍵ハ、鏽ニヨリテ

腐蝕シ、日常使用スル鍵ハ、光輝ヲ放ツ。(フランクリン)

レシング

ドイツの大
文豪。主と
して、批評
の筆をとれ
り。(二三八
九年―二四
四一年)

思へらく

一三、レシングの比喩譚

鷺毛の純白なるは、まことに霜雪と、その美を競ふに足れり。嘗て、一箇の鷺の、頻に、その羽毛の美を誇れるがありて、窃に思へらく、わが前生は、恐らくは鵠なりしならんと。これより、彼は、その同類と交ることを屑しとせず。ひとり、その群を離れて、強ひて、鷹揚なる態度を装ひつつ、優然として、池上に逍遙せり。かくて、彼はふと、わが頸のつけねの短きに過ぎて、外觀の醜きに心付きぬ。やがて、満身の力を籠めて、そを引き延さんとせり。されど、そはあだなりけり。彼の頸のつけ

ねは、あまりに、武骨に過ぎて、引き延さんにも、力及ばざりけるなり。さても、彼が苦心の結果は、いかなりしぞ。彼は、鵠となること能はずして、却りて、一箇の、畸形なる鷺となれり。

伴^oうて
(伴ひて)

曾て、一疋の驢馬を、その危難より救ひたりし獅子の、それと相伴うて、森に行きぬ。無遠慮なる鶏、これを見て、樹上より叫んでいはく、英邁なる君よ。君は、驢馬の如き輩と伍するを恥ぢざるかと。この時、獅子は、徐に、何者たりとも、來りて、余に投ずる者には、余は、好みて、任俠を施さんとすといへり。英雄、豪傑は、いかなる

弱者をも棄てざるが故に、彼等は、常に、その下に集ることを喜ぶ。

亂暴なる一少年を乗せて、さも得意氣に、ここかしこ驅け回れる馬あり。牛、その馬に對ひ、さばかりの少年に御せらるること、汝が、至大なる恥辱にあらざるやといへば、馬は振り反りつつ、事もなげに答へて、されど、今、この一少年を振り落したればとて、余は、幾何の名譽をか博し得んといへり。

一四、植物の景觀と氣象との關係

植物の景觀と、自然の氣象とは、自らなる關係あり。互に相依り、相助けて、以て、宇宙の美を現出す。故に、晴雨、曇、雲、雪、風、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する植物の景觀に注意する時は、まことに面白き趣あるものなり。

春の日の、霞たなびきて、曇勝なる空に、山櫻の咲き出でたるは、實に、趣深きものにして、調和の美しいふべからず。今、假に、櫻花をして、澄み渡る秋の空に開かしめばいかに。恐らくは、優美艷麗なる、その特性の十が一をも現すこと能はざらん。又、紫雲英、蒲公英などの、

一面に咲き亂れたる春の野に、蝶蜂などの、心地よげに飛びかはせる光景は、よく、この頃の日和の特徴をあらはせり。

萬緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は、水分を含みて、夕立の雲起り來べきかと思はるものなるが、さる空合に、緑滴らんばかりなる茂樹、叢竹の、枝さし交したるは、配合、殊に妙にして、人をして、坐に、夏の氣分の面白きを感じしむ。

秋晴の節は、天高く、氣清みて、遠きあたりまで見やられるに、槭樹、公孫樹などの色づきたるが、その快晴の氣に照し出されたるなど、またいひ難き趣あり。冬の末、春の初の、寒く晴れたる朝に、梅、臘梅などの咲き出でたるも、心ちよきものなり。

見ゆ。

曇の空には、様様あれど、春の花曇は、最も趣あり。又、今にも降り出でんかと思はるる空には、柳、杉、樅などの林、最も面白く見ゆ。

雨の面白きは燕子花、花菖蒲、溪蓀などの咲き出づる、梅雨の頃なるべし。降るかとするれば晴れ、晴るるかとするれば、また降り出でて、その度毎に、花の艷麗を増すなど、人をして、限なき、一種の幽情を催さしむ。殊に、

これらの植物の花^{ハナ}と葉^ハとは、自ら雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は、その上に、小玉水となりて止れるが、その美しさ、實に、喩へん方なし。

雪は、寒國のものなれば、これに適するは、寒地の植物なれど、暖地のものも、亦、これに遭ひて、面白き景色を見するものなり。かの常磐木の類例へば、樅、杉、松などの濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又、南天燭の赤き實の、その間にほの見えたる、共に見棄てがたき美觀なり。

風の趣も、また棄て難し。そよ吹く風の、草木を渡り

て、優しき樂を奏する、木枯の、落葉を吹き卷きて、凄じき音をたつる、共に興なからずや。殊に、野邊の芒、水邊の蘆の、秋風に戦げる様は、秋の風物の、最も、趣深きものなるべし。又、秋の夕、澄み渡れる空に、一點の雲もなく、さしたる風の渡るとも見えぬ、樹樹の梢の、そよそよとうち戦ぐは、いひ難き趣あるものなり。

雲は、四時を分かず面白きものなり。春雲のたなびきて、花か^{ハナ}と見紛ふ空合、夏草の茂きが上に崩れかかれる雲の峯、秋野の空に飛ぶ白雲、又は、雪雲に對する落葉林の景色など、皆、それぞれに、趣あり。又、かの木曾

木曾
信濃國西筑摩郡。

日光
下野國上都賀
郡。

日光あたりの樅、榎、落葉松などの生ひ茂れる深林に、
なかば、薄雲のかかりたるは、誠に、よく、幽邃の趣を現
すものなり。

霧は、高原に多きものなれど、平地、平原にも、亦、全く
なきにあらず、夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの
常磐木の隠見する様、田沼、湖水などの、一面に罩めら
れたるさま、亦、一種の風趣あり。

露は、夏秋に下るものにて、朝、早く起き出でて、草村
の間を行かば、その葉毎に、美しく置きて、恰も、白玉の
如くなるを見ん。殊に、稻、蘆などの禾本科の植物、又、欵

冬などの葉の緑なる露は、規則正しく置けるを以て、
その觀、頗る美なり。

月は、季節によりて、その觀一ならず。春の夜は曇が
ちにて、朧月多し。世には、この朧月に、夜櫻を配して、得
難き美景なりといふ者もあれど、かの、朝日に匂ふ山
櫻の優美にして、壯快なるに比すべくもあらず。夏の
月は、これに反して、頗る快活なるものなり。ことに、雨
後の木の葉、草の葉に映じたる月光は、一層の涼味を
感ぜしむ。中秋の満月の清光は、人の、よく知るところ
なり。

朝日に匂ふ
本居宣長の歌
に、敷島の犬
和心を人とは
ば朝日に匂ふ
山櫻花。

暗香の浮動
宋の林逋の梅の詩に「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」

月夜に配合せる植物は多からず。かの、暗香の浮動を賞すべしといふ梅なども、その花の美觀は、なほ、晝間を以て勝れりとす。されど、一面よりいへば、これといふべき好配合なきは、偶以て、適くとして可ならざるはなき、月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐の月、皆、それぞれの佳趣を具へざるはなく、さては、秋野の満月、夏山の曉月など、いづれも、他に求め難き景致あるにあらずや。三好學—植物生態美觀による

一五、池野大雅

んたす
池野大雅
（二三八三年—二四三六年）

文人畫家として有名なる池野大雅は、甚だ、奇行に富みたる人なりき。彼嘗て、人に語りていはく、われ若かりし頃、馬術を習ひぬ。その時、師の言に、汝、武士なら



池野大雅肖像

ねば、騎馬の法を學びても、要なからん、されど、羈旅のをり、輕尻馬などに乗りて、落つるすべを知らずば、怪我すべしとありしかば、それより、落馬の法を學びて、屢、災厄を免れたり。又、大雅が、なほ若年にして、父の業を襲ぎ、扇を鬻ぎて、活計を立てしこ

る、その旅行のほどに、節季に當りたれば、一族集りて、帳簿を調ぶるに、篆書もてしるしたれば、解し難きに苦みぬ。さて、やりやり、人を頼みて、整理を了へ、他日、この事を以て、大雅を誡めければ、その後は、楷書にて認められたれど、なほ、漢文にて、帳簿にしるせりとぞ。

大雅、かくの如く、物に羈束せられず、奇行を以て稱せらるといへども、彼は、これをもて、故に、世を驚かさんとするものに非ず。その行爲は、衒へるに非ずして、その、爛漫たる天真より出でたるなり。されば、頗る、形式の末を輕んずれども、決して、禮讓の誠意を失ふこ

ジマン
カナマ

冷泉爲村
歌人。藤原氏。
爲久の子

となかりき。嘗て、一豪富ありて、揮毫を請ひしが、荏苒として、久しく、その望を果さず、使の至る毎に、近日とのみいひぬ。一日、使、また來りたれども、畫は、いまだ成らず。使、門を出づとて、咤きていはく、咄、この畫工。人を勞すること幾度ぞ。自負か、懶惰か、人を侮るか。と。大雅、これを聞きて、急に、使を呼び返し、君が言ことわりなり。われ過てり、過てり」とて、直に、筆を染めぬ。又、一門生の、贗畫を作るものあり。大雅怒つて、これを逐ひ、罪を謝すれども赦さずしていはく、貧は天のみ、恥を知らざるは、人にあらず」と。その他、愛顧を受けたる冷泉爲

村の恩を忘れず、爲村の病めるや、日日、その門前に至り、病狀を伺ひて歸れりといふが如き、また、母の歿するや、葬るに當りて、自ら、その棺を擔へりといふが如き、一として、至情の發露せしものにあらざるはなし。大雅の人となりかくの如く、大雅の畫も、またかくの如し。一見すれば、唯意志の奔放に任せて、一氣に塗抹したるものに似たりといへども、更に熟視すれば、苦心の痕、歴歴として畫面に溢るるものあり。大雅、好んで、名勝を遊歴し、見る所、觸るる所、これをおのが藥籠中にをさめ、山川の状態、雲煙の變化、一一精察して

至らざるなく、また、よく、古人の墨蹟を研究して、その筆法を究め、而して後、漸く、自家の特色を發揮す。これを輕輕の筆といふは、眞に、皮相の見に過ぎざるなり。

（藤岡作太郎—近世繪畫史）

一六、驟雨浴

西は、本氣に曇つた。雷様も、眞面目に鳴りだした。もう、多摩川のむかうは、雨が降つて居るであらう。自分は、大いそぎで下りて、庭に乾してあつた仕事著や、跣足袋を取り入れた。風がひやりとした。日傭の婆さん

も、大いそぎで、干麥や、麥稈を取り入れて居る。
 座敷の南縁に立つて居ると、ぼつりと一つ、大きな、
 白い粒が落ちて、乾いて、黄粉のやうになつた土に、こ
 ろりところんだ。次いで、大粒小粒、小粒大粒、交る交る、
 斜に落ちては、地上にもんどり打つて、團子のやうに
 ころがる。二本松のあたりは、薄墨色に掻き消されて、
 推し寄せてくる、白い驟雨の進行が、目に見えて近づ
 いてくる。

自分は久しく、海員の海上生活を羨んで居た。總員
 入浴用意の一令で、手早く、著物を脱ぎ棄て、石鹼とタ

Towel タオル

騒うらやま (騒うらやまぎて)

Bucket バケツ

オルとを、両手に持つて、眞黒の健兒共が、ずらり、甲板
 に竝んだところは、面白い見物であらう、やがて、雷鳴、
 電光、よろしくあつて、錨索大の雨の棒が、瀑おとしに、
 どうどとうとくる、さあ今だ、總員驚の如く立ち騒いで、
 大いそぎで、石鹼を塗る、洗ふ、大洋の眞中で、無錢湯が
 開かれるのだ、ぐづぐづすれば、石鹼を塗つたばかり
 の斑人形を残して、いたづらな驟雨は、ざあと驅け抜
 けてしまふ、四方、水の上に居ながら、バケツ一杯の淡
 水にも、ありつかれぬ海の子等に、蒸溜水の天水浴と
 は、何等贅澤の沙汰であらうと。

不幸にして、自分は、海上ならぬ陸上に居る、熱帯ならぬ温帯に居る。壯快限なき、甲板の驟雨浴は眞似られぬが、自己流の驟雨浴なら、出来ぬことは無い。やつて見るかなと、手早く、浴衣を脱いで、眞裸になり、つと走り出て、芝生の眞中に、棒立に立つた。

ぽつり、肩を撲つ。脳天までひやりとする。またぽつり、またぽつり。そのたびに、肩や、腹や、背中が、ひやりとする。好い氣持だ。しかし、まだ、夕立の先手で、手痛くは遣つて來ぬ。

冠つて
(冠りて)

「これを冠つていらつしやい。」

先作

と云つて、妻は、硝子の、大きな鉢を持つて來た。硝子は、電氣を絶縁するといふので、雷除の禁厭に冠れといふのだ。よしと受け取つて、いきなり、頭に冠つた。黒眼鏡を掛けた、毛だらけの裸男が、頭に、硝子鉢を冠つて、直立不動の姿勢をとつたところは、新式の河童である。不圖思ひついて、自分は、頭上の硝子鉢を仰むけにし、両手で支へて立つた。一つ、二つ、三つと、三十ばかり數へると、取りおろして、ぐつと、一氣に飲み乾した。やはらかな天水である。二たび、三たび、興に乗じて、この大觴を重ねた。

「もう上つていらつしやい。

妻が呼ぶ頃は、夕立の中軍、まさに殺到して、四圍は、眞白になつた。電が、びかりとする、雷が、頭上で鳴る、ざあざあ^と落ちて来る、太い雨に身の内撲たれぬ處もなく、ぐつと息が詰る。驟雨浴もこれまでと、灌の如く迸る樋口の水に、足を洗はせて、身震して、縁に飛び上つた。

上ると、どしや降になつた。庭の平たい甕の水を、雨が亂れ撲つて、無数の魚兒の唼啣するやうに跳ね上げて居たが、それも、最早見えなくなつた。

しばらくして、夜の明けるやうに、西の空が明るくなり出した。あがり際の、織い雨が、白絹糸を閃す。一足、縁に出て見ると、東南の空は今眞闇である。最早、夕立の先手が、東京に攻め寄せた頃である。二百萬の人の子の、周章てふためく態が、眼に見えるやうだ。

何時の間にか、はつたり、雨は止んで、金光いかめしく、日が現れた。見る見る、地面を流れる水が止つた。風が、さつと、西から吹いて来る。庭の青松が、ばらばらと、雫を散す。何處かで、蝸が、かなかなと、心地好ささうに鳴き出した。

止んで
(止みて)

時計を見ると、二時三十分。夕立は、唯三十分續いたのであつた。

浴衣を引き掛け、低い薩摩下駄を突っかけて、畑に出た。さしも乾いて居た畑の土が、しつとりと濕つて、玉蜀黍の下葉や、コスモスの下葉が、刎ね上つた土まみれになつて、重げに低れて居る。何處を見ても嬉しさうに、緑が戦いで居る。東の方では、雷が、まだ鳴つて居る。

「虹收仍白雨、雲動忽青山。」

かく打ち吟じつつ、西の方を見た。高尾、小佛や、甲斐の

Cosmos
コスモス

高尾、小佛
共に武蔵國南
多摩郡。

諸山は濃淡の碧も鮮に、富士も、一筋、白い豎縞の入つた浅葱の浴衣を著て、すがすがしく微笑して居る。

蜩が、また、一聲鳴いた。(徳富蘆花―蚯蚓のたはこと)

一七、夏の夜(玉井晩翠)

はや黄昏の影寄せぬ。
風おもむろに吹き通ふ、
みやこ大路の夏げしき、
洗ひすてたる夕立の、
なごり柳に玉とめて。

おほ空たかく月出でて、
 八百の街の隈もなく、
 てらす涼しき夏の夜や。
 雲は靜にをさまりて、
 のこる稀なる星の影。
 そぞろあるきに夜は更けて、
 袂はおもし露ふかし。
 月ななめなる時計臺

二つの針のかさなりて、
 うつも高しや時の數。

かたむきかかる天の河、
 仰ぎて家路もとめ行き、
 逍遙の群あともなし。
 ちまたのあるじ今はただ、
 月のひかりと吹く風と。

あるじ

本試験

一八、洋學の由來

長崎
肥前國西彼
杵郡。江戸時
代唯一の開
港場。

青木昆陽

名は敦書、文
藏と稱す。(二
三三八年—二
四二九年)

前野蘭化

良澤と稱す。
豊前中津藩
醫。(二三三
年—二四六三
年)

桂川甫周

幕府の醫。(二
四一年—二
四六九年)

杉田鷗齋

玄白と稱す。
若狭小濱藩

洋學の由來を尋ぬるに、昔、享保のころ、長崎の譯官
某等、和蘭貿易の便を計り、その國の書を読み習はん
ことを請ひて、その許可を得たり。これ、即ち、わが邦の
人が、^蘭蟹行の文字を學べる始なり。その後、寶曆、明和の
頃、青木昆陽、命を奉じて、その學を唱へ、又、前野蘭化、桂
川甫周、杉田鷗齋等起りて、和蘭の學に志し、相與に切
磋して、各得る所あり。されど、なほ、この學の始なれば、
書籍甚だ乏しく、師友もなければ、遠く、長崎の譯官に
就きて、その疑を質し、偶、和蘭人に會へば、その教を請
へり。かく不便なりしかど、この人人、いづれも英邁の

醫。(二三九三
年—二四七七
年)

大槻玄澤

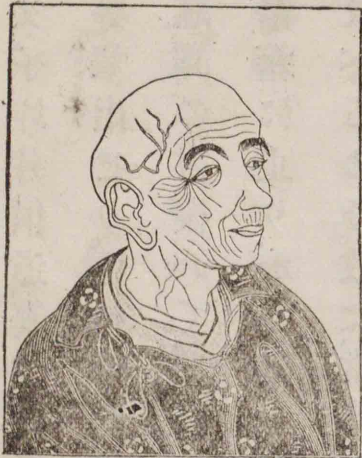
仙臺侯の侍
醫。(二四〇三
年—二四七三
年)

宇田川槐園

玄隨と稱す。
美作津山藩
醫。(二四一五
年—二四五七
年)

宇田川榛齋

父子
津山藩醫榛齋
(二四三九年
—二四九四年
年)とその養
嗣榛庵(二四
五八年—二五
〇六年)と。



杉田玄白肖像



前野良澤肖像

士にして、只管、草創の業に、身を委ね、日夜研精して、寢
食を忘るるに至れり。或は傳
ふ、蘭化、長崎に往きて、和蘭語
七百餘言を學び得たりと。こ
れに由りても、古人が、力を用
ゐることの切なりしと、修學
の難かりしとを察すべし。
その後、大槻玄澤、宇田川槐
園等、繼いで起り、降りて、天保
弘化の際に至り、宇田川榛齋

坪井信道 美濃の人。長州侯の侍醫となる。(二四五五年—二五〇八年)
 箕作阮甫 津山の人。後幕臣となる。(二四五九年—二五二三年)
 杉田成卿兄弟 成卿(二四七七年—二五〇九年)とその義弟支端(二四七八年—二五四九年)と共に江戸の人。
 緒方洪庵 備中足守藩士。後幕府の侍醫となる。(二四七〇年—二五二三年)

父子、坪井信道、箕作阮甫、杉田成卿兄弟及び、緒方洪庵等輩出せり。この時は、讀書、譯文の法、漸くひらけ、諸家翻譯の書、續いて、世に出でたれども、おほむね、和蘭の醫籍に止り、かたはら、窮理、天文、地理、化學等の數科に及べるのみ。故に、當時、この學を稱して、蘭學といへり。蓋し、この時といへども、通商の事は、支那の外は、和蘭一國に限り、來舶の地も、唯、西陲の長崎のみなれば、尙書籍の乏しかりしは、論なく、すべて、修學の道、甚だ便ならざりき。

然るに、嘉永の末、アメリカ人が渡來せし後、これと、

和親、貿易の約を結び、又、好を、英、佛、露等の諸國に通ぜしより、わが邦の形勢、終に一變し、世の士君子、皆、かの國の事情に通ずるの要務たるを知れり。因りて、百般の學科、一時に興り、先達の士、各、その學を唱へ、生徒を教へ、ここに至りて、始めて、洋學の名起れり。これ、學術の一大進歩なり。

顧ふに、一事の將に開けんとするや、進むに、必ず、漸を以てす。譬へば、樓閣に登るに、階級あるが如し。即ち、天保、弘化の際、蘭學の行はれしは、寶曆、明和の諸士、その初階をなし、方今、洋學の隆盛なるは、各國の通好に

因れりと雖も、實に、天保、弘化の諸家、その次階をなせるなり。(慶應義塾五十年史)

一九、真淵と宣長

時は夏の半、いやとこせと、長閑やかに唄ひ連れゆく、御伊勢參の群も、春先ほどには騒しからぬ伊勢松阪なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に、「御免」といつて、腰をかけたのは、本居舜庵といふ、魚町の、年の若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて、皇國學くわこくがくの書かみやら、漢籍や

本居宣長
(一三九〇年
一四六一年)

岡部先生
賀茂真淵のこ
と、(一三五七
年—一四二九
年)

らを、常に買ふ、この店の常花客であるから、主人は、笑ましげに出迎へたが、手をうつて、ああ、残念なことをしなされた。あなたが、よく、名前をいつておいてになる、江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子と供を連れて、お立寄になつたに」といふ。舜庵は、いつもの、ゆつくりした調子とは違つて、先生が、どうして此處へ」と、あわただしく問ふ。

主人は、何でも、田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸に、參宮をなさらうといふので、一昨日、あの新上屋へ、お著きになつたところ、少し、お足に、

浮腫ウレミが出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお休になつて、參宮にお出かけになりました。舜庵シユンアン、それは残念なことである。どうかして、お目にかかりたいが、カ。迹を追うてお出でなされませ。追ひ付けませう」と、主人がいふので、舜庵は、一行の様子を、大いそぎで聞き取つて、迹を追うた。

跡を追うて、松阪の市街を離れて、次の宿なる垣鼻カキノシ村のさきまで行つたが、どうも、それらしい人に追ひつき得なかつたので、すごすごと、我が家に戻つて來

た。

鳥羽
志摩國志摩郡



賀茂眞肖像

數日の後、岡部衛士は、神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から、鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に、再び、松阪の本陣新上屋に宿つた。若し、歸りに、また泊られたなら、どうか知らせて貰ひたいと頼んでおいた舜庵は、夜に入つて、新上屋からの使を得たので、取るものも取り敢へず、旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の

村田春郷

江戸の人。(二
三九九年—二
四二八年)

春海

額錦齋、又翠
後と號す。

(二四〇六年—
二四七一年)

有徳公

八代將軍徳川

吉宗。(二三二

四年—二四一

一年)

田安中納言

宗武

(二三七五年—
二四四一年)



本居宣長肖像

春海は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衛士は、仄暗い行燈の下において、舜庵を引見した。賀茂縣主眞淵、通稱岡部衛士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども、既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名噴噴たる、一世の老大家である。年老いたれど、頼ゆたかな、この老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を、溫和なる性格に包んでゐる三十四

契沖
大阪の僧、國
學者。(二三〇
〇年—二三六
一年)

歳の壯年、しかも、彼は、二十三歳にして、京都に遊學して、醫術を學び、二十八歳にして、松阪に歸つて、醫を業としてゐたが、京都では、ただ、醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は、長い間、欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる、古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は、若人の言を、靜に聽いて、懇に、その意見を語つた。我も、固より、神典を解きあきらめんと志であつたが、それには、まづ、漢意を、清く離

れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それゆゑ、自分は、専ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡、いくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛りで、ゆくさきが長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。しかし、世の學に志す者は、とかく、低いところを経ないで、すぐに、高い處へ登らうとする弊がある。かくては、低い處をさへ得ることが出來ぬのである。この旨を忘れず、心にしめて、まづ、

低いところを、よく固めて、さて、高い處に登るがよいと諭した。

夏の夜は、早くも更けて、家家の門の、皆とざされ果てた深夜に、老學者の言に感激して、面ほてりした若人は、暗夜の道の、いづこを踏むとも覺えず、中町の通を、西に折れ、魚町の東側なる、我が家の潜戸を這入つた。鄰家なる桶利の主人は律義者で、いつも、遅くまで、夜なべをして居る。今夜も、とんとんと、桶の籬を入れてゐる。時には、やかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には、何の音も響かなかつた。

村田傳藏
眞淵の門人。
坂大學の通
稱。

舜庵は、その後、江戸に、便を求め、その翌年の正月、村田傳藏が、中にはひつて、名簿を捧げ、うけびごとをし、るして、縣居の門人録に、名を列ねる一人となつた。爾來、松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、これは答へた。門人とはいへ、その相會うたことは、僅に一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松阪中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照した。しかも、その仄暗い燈火は、わが國文學史の上に、不滅の光を放

つて居るのである。(佐佐木信綱—賀茂眞淵と本居宣長)

二〇、吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前は、まだ無い。吾輩が、この家へ住みこんだ當時は、主人以外のものには、甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ねつけられて、相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重せられなかつたかは、今日に至るまで、名前さへ附けてくれないので解る。吾輩は、仕方がないから、出來得るかぎり、吾輩を入れてくれた主人の傍に居ることをつとめた。朝、主人

が、新聞を讀む時は、必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寢をする時は、必ずその背中に乗る。これは、あながち、主人が好といふ譯ではないが、別に、構手がなかつたら、已むを得ぬのである。その後、色色經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側に寝ることとした。しかし、一番、心持の好いのは、夜に入つて、このうちの子供の寢床へもぐり込んで、一緒に寝ることである。

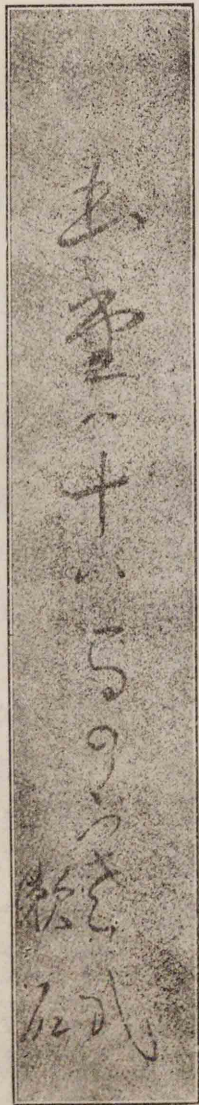
はひつて
(はひりて)

この子供といふのは、五つと三つで、夜になると、二人が、一つ床へはひつて、一所に寝る。吾輩は、いつでも、

彼等の中間に、己を容るべき餘地を見いだして、どうか、かうにか割り込むのであるが、運悪く、子供の一人が、眼を醒すが最後、大變な事になる。子供は、殊に、小さい方が、質が悪い。猫が來た、猫が來たといつて、夜中でも、何でも、大きな聲で泣きだすのである。すると、例の神經衰弱性の主人は、必ず、眼をさまして、次の部屋から飛びだしてくる。現に、先達てなどは、物指で、尻べたを、ひどく叩かれた。

吾輩は、人間と同居して、彼等を觀察すればする程、彼等はい儘なものだと、斷言せざるを得ないやうに

なつた。ことに吾輩が、時時同衾する子供の如きに至つては、言語道斷である。自分の勝手な時は、ひとを逆さにしたり、頭へ、袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつひの中へ押し込んだりする。しかも、吾輩の方で、少



夏目漱石筆蹟

しでも、手出をしようものなら、家内總がかりで追ひ廻して、迫害を加へる。この間も、一寸、疊で、爪を磨いだら、細君が、非常に怒つて、それから、容易に、座敷へ入れ

ない。臺所の板の間で、他が顛へて居ても、一向平氣なものである。吾輩の尊敬する、筋向の白君などは、逢ふ度毎に、人間程、不人情な者はないといつて居る。白君は、先日、玉のやうな子を、四疋産んだのである。所が、この家の書生が、三日目に、そいつを、裏の池へ持つて行つて、四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は、涙を流して、その一部始終を話した上、どうしても、我等猫族が、親子の愛を完くして、美しい家庭的生活をするに、は、人間と戦つて、これを剿滅せねばならぬといつた。一一尤の議論と思ふ。

又、鄰の三毛君などは、人間が、所有權といふことを解して居ないといつて、大いに憤慨して居る。元來、我同族間では、目刺の頭でも、鯨の臍でも、一番先に見付けた者が、これを食ふ權利があるものとなつて居る。もし、相手が、この規約を守らなければ、腕力に訴へてよい位のものだ。然るに、彼等人間は、毫も、この觀念がないと見えて、我等が見付けた御馳走は、必ず、彼等のために掠奪されるのである。彼等は、その強を頼んで、正當に、我等が食ひ得べき物を奪つて、澄して居る。白君は、軍人の家に居り、三毛君は、辯護士の主人を持

奪つて
(奪ひて)

つて居る。吾輩は、學者の家に住んで居るだけ、こんな事に關すると、兩君よりも、寧、樂天である。唯、その日、その日が、どうにか、かうにか送られればよい。いくら人間だつて、さう、いつ迄も榮えることもあるまい。まあ、氣を永く、猫の時節を待つがよからう。

(夏目漱石—吾輩は猫である)

二一、邦人の常識

常識とは、英語の所謂コンモンセンスをいふのであらう。日本では、古來いひ傳へて居る「分別」といふ言

Commonsense
コンモンセ
ンス

葉が、幾らか、これに似て居る。分別のある人、分別のない人」といふ様な言葉は、今日、常識、非常識といつて居る場合に、多く使はれた。學問の力を借らず、自然に、公平正當な辨別、判斷が出来、やかましく、理窟をいはずに、出来る事なら、さつさとやる、出来ない事は出来ないとして、初から、手を付けないといふ風の人を、分別のある人」といつた。

コンモンセンスは、英國に於いては、極めて、意味の廣い詞である。智識の上にも、道德の上にも、共通して居る。この常識が、國民の、一つの通有性になつて居る

爲に、上は、政治の事より、下は、箇人間の交際に至るまで、何事につけても、萬事が、大層都合よく、滑に、且、手取りばやく運ぶ。一言にしていふと、言行に、あまり、過不足がない。これは、學問から得たのでもなく、又、特に、人から教へられたのでもなく、自然に有して、自然に發達していく。尤も、家庭教育、學校の教育、社會の教育、國の歴史、習慣が、皆、この特殊の能力を、自然に發達せしむる様に出来て居る。この能力がコンモンセンスである。或人は、これを、活力と抑制との調和だといつた。わが日本人中には、英人の常識を歎美すると同時

に、日本人には、この常識が缺乏して居ると論ずる者が多いやうである。余は、日本人は、寧ろ常識に富んで居る國民であると論結したい。尤も、今日の我が國民は、常識に乏しい點が、いろいろと見える。しかし、これは、過度の時代に於いて、思想界の混亂の爲に、國民の常識が、一時、晦冥になつて居るので、維新までのわが國民は、もつと立派な常識を有して居たのである。これを證する爲に、最も平和的、自然的に、我が國民性の發現を縦にして、あまり、外國思想の混入しなかつた、徳川氏三百年間の政治を見るに、純粹な常識政治とい

徳川家康
(二二〇二年
二二七六年)

ふの外はない。この幕府の政治を創めた徳川家康は、わが、史上の英傑中、最も模範的常識の人といはれるだけあつて、その政治の迹を見ると、理窟よりも、常識で遣つた事が、頗る多いやうである。家康の政治には、如何に悪い事でも、五十年間繼續して存在して居るものは、輕輕しく潰さぬといふ事があつた。その意は、五十年も存在して居れば、必ず、存在の理由と必要とがなければならぬ。單に、皮相から見て悪いといふので、打ち壊してしまふのは無分別であるといふのであつた。故に、假令、敵の作つた法でも、決して、輕輕しく

破壊することをしない。甲州に於ける信玄の遺法を、
勉めて存續せしめたのも、その一例である。是等は、英
人と、餘程よく似た所である。

これに依つて見ても、維新前までの日本人は、決して、常識の缺乏して居た國民ではなかつた。常識人種の評判を取つた英民族などに優るとも、劣ることのない、又、佛獨、その他に比較して、遙に多く、常識に富んで居た國民であつたと思ふ。唯、維新開國の後には、國勢、全く一變した爲に、一時、心の平調を失ひ、且、すべて、新奇な外國の制度を輸入し、これに摸倣するに急を爲

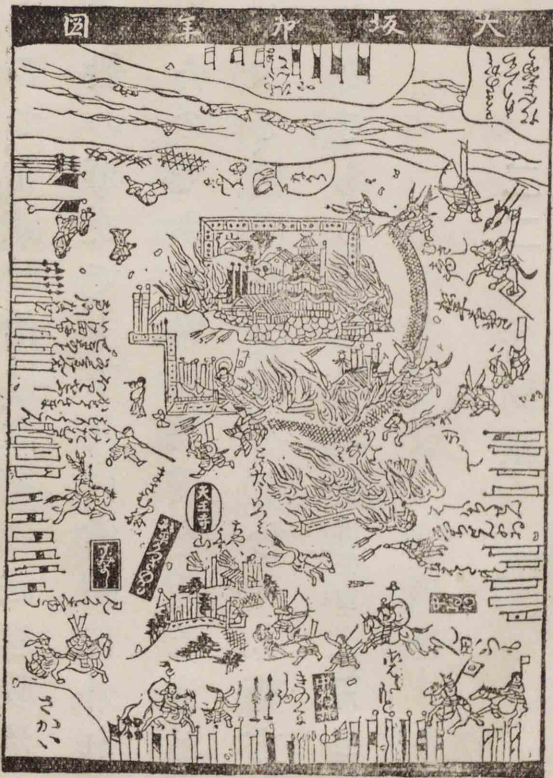
まづ、その形式を執つて、その精神を執る違がなかつたので、常識政治は、理窟の法理政治となり、政治以外、百般の事まで、上下共に常識に外れたことが、多くなつたのである。常識修養を説く者は、この一事を、よく考へて、舊慣を復活せしむべき藥方を求めることが、必要であらうと思ふ。(鎌田榮吉―進取論)

二二、新聞紙

新聞紙は、實に社會の耳目にして、一日も、これ無からんか、吾人は、聾の如く、また、瞽の如くならん。されど、

それは、吾人、今日の考にして、五十餘年前にありては、さる物は、聞くことも、亦、見ることも得ざりしなり。

柳營
前漢の周亞夫が、細柳に營せし故事より出で、將軍の役所をいふ。



の要具なりき。一般に發賣するものには、瓦版と稱し、

徳川時代に
は、諸藩留守居
役の柳營御沙
汰の廻狀、諸藩
士人の風聞書
など、世間の事
態を知る、唯一

火事、非常、祭禮の模様など、時時の出來事を、粗末なる木版に刷り、讀賣したるものあるに過ぎざりき。

濫觴
家語に「江始
出、于岷山、其
源可三以濫」
觴。

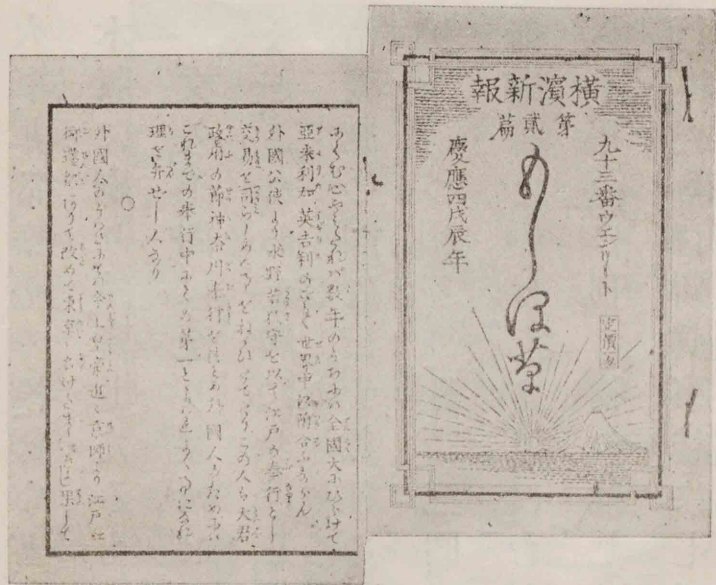
ブラック
傳未詳。

文久年間に至り發行せるバタビヤ新聞、六合叢談など、これ、わが國における新聞紙の濫觴なるべし。元治、慶應の際には、十數種の新聞相次ぎて、世に出でたりき。いづれも、毎月二三回、或は、一週一回の發行にて、新聞紙といはんよりは、むしろ、雑誌といふ方正當ならん。その日刊の物のはじめは、英人ブラック氏の發行したる日新眞事誌にして、紙數は、僅に四枚なれど、紙は、洋紙を用ゐたり。これに次いで起りたるは横濱

新報なり。つぎに東京日日新聞、つぎに郵便報知新聞、

つぎに朝野新聞、つぎに新聞雜誌なり。

日新眞事誌、横濱新報のことは、姑く措き、今、なほ、新聞のおもなるものといはるる東京日日新聞も、はじめは和紙にて、片面摺なりしかば、見窄らしきこと、恰も、引札に



似たり。名高かりし、この新聞紙すら、かくの如し。これにて、その他の新聞紙の如きは、大かた想像せらるるならん。

明治七年の末頃より、東京日日新聞社も、新聞雜誌社も、大いに、改革をなし、東京日日新聞は、紙幅をひろげ、新聞雜誌は、曙新聞と、名を改め、共に、八年一月一日、その初刷を配達することを廣告せり。さるに、活版器械の不完全なる、職工の不熟練なる、いづれも、その日に出来上らず、一月一日の日附のものを、東京日日新聞は、二日の朝に配達し、曙新聞は、二日の夕に配達せ



創刊當時の東京日日新聞

り。東京日日新聞は東京昨日新聞なり、曙新聞は夕暮新聞なり」とは、その當時の笑柄なりしよし、よく、人の語るところなり。輪轉器械を利用する今日より考ふれば、その迂遠なりしこと、洵に驚くべきにあらずや。かくて、各社には、宿學、

岸田吟香
美作の人。(二
四九三年—二
五六六年)
栗本鋤雲
舊幕臣。宛庵
と號す。(二四
八二年—二五
七一年)
成島柳北
舊幕臣。名は
弘。才人の文
章家。(二四九
四年—二五四
四年)

鴻儒多く、日日社には、岸田吟香あり、報知社には、栗本鋤雲あり、朝野社には、成島柳北あり。各、一方に、旗幟を樹てて、互に下らざりしかど、要するに、雜報のみにて、社説といふものあることなく、その雜報も、政治上の事は憚りて、記載せず。その無味なる、その單調なる、今日の新聞に比ぶべくもあらず。福地櫻癡が、日日社に入り、社説を掲げしが、社説といふものの初か。それより、漸次、各新聞の紙上に、政治に關する論説も現れ、寄書等も現るるに至れり。

今や、新聞紙は、大いに發達して、その面目を革め、外

形上は、殆ど、遺憾なけれど、その内容は、なほ飽かぬふしなきにあらず。即ち、公平に、忠實に、精細に、眞に、社會の耳目たる責任を盡せりや否やに至りては、聊か疑なき能はず。これを、かの外國の新聞紙に比する時は、なほ、霄壤の差あるに似たり。

新聞事業の盛なるは、英國に如くものなし。その大新聞と稱するものを觀來れば、歐洲文明の諸現象を包羅して、殘すことなく、政事、商工、文學に就いて、ロンドンは無論、パリ、ウィーン、ベルリン、ニューヨークより、アラビヤの砂漠、印度山中の出來事に至るまで、わ

パリ 佛蘭西の首府。
Vienna 奧太利の首府。
ウイーン
Arabia 亞細亞の西にある半島。
アラビヤ
就いて (就きて)

これを放てば云々

中庸に、「放て之則彌六合、卷之則退藏於密。」

ペンニー

Penny

ボアソナード

フランスの人。法學博士。明治の初年日本に聘せられ、諸法律の草案を作り、又教育に従事せり。(二四八五年一〇年)

一一三、ボアソナード氏を送る詞

づか八頁の中に現れざるなく、これを放てば、六合に彌り、これを卷けば、密に藏るるものといふべし。さて、是等の材料を蒐集し、記載し、發兌するまでには、世界各地の通信員をあはせて、十萬の人を使用すといふ。而して、その代價は、僅に一片なりとは、廉も、亦甚しからずや。

余は、一日、朝早く、ボアソナード君を、永田町の家を訪ひたるに、君は、例の如く、文机に凭りて、餘念なく、法

一一三、ボアソナード氏を送る詞

一一七

山田司法大臣
名は顯義。山口の人、陸軍中將。(二五〇五年—二五五年)

條を起草し居られたるが、その顔色衰へて常ならず
覺えければ、病やある」と問ふに、病は、かくこそとて、そ
の足を示さる。見れば、二つの脚、ともに、水氣に腫れふ
とりたり。余は、何故に、靜に養生し給はざるか」と問へ
ば、司法大臣と、約ありて、某の日までに、若干の箇條を
起草し畢へざるべからず。この義務は、病によりて、背
くこと能はず」と答へらる。余、且は驚き、且は覺束なく
思ひて、いそぎ、山田司法大臣の邸に至り、この由を告
ぐるに、司法大臣も、ともに驚かれ、即ち、祕書官をして、
君を訪問せしめ、速に轉地療養あらんことを勧めら

うらく

れつ。君は、約束當事者の命を受けて、始めて、心おきな
く、田舎に轉養せられけり。



銅像 アソナード

余は、この時、家に歸り、竊
に歎息していへらく、凡、つ
かさある人人にして、かく
までに深き義務心に伴へ
る勉強を以て、いそしみた

らんには、立法事業、竝に、諸般の事務の擧らざること
やあるべきと。この事、一小事件なれども、余は、將來、ボ
アソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價

値ありと信ずるが爲に、別に臨みて、これを、公衆の前に述ぶ。君の、二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に譲りて、ここにいはず。

余は、實にボアソナード君と、二十年來の友なり。場合によりては、我が師なり。さるを、病の爲に、餞の席に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。今書して、君の旅行の安全を祝し、併せて、左の詞を以て、君を餞す。余は、君が、わが國を呼びて、第二の本國といへりしことを記憶す。余輩は將來に、遠く、君を、海の彼方に慕ひ望むと同時に、君も、また長く、第二の本國を忘

あはせて
(併)

れざることを知る。ボアソナード君よ。君の第二の本國が、立法上、および、諸般の事業において、いかに發達するかを見て、幸に、余輩のために、必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。(井上毅一梧陰存稿)

二四、事業の選擇につきて

肅啓。大暑の候に御座候處、愈御清福の由、欣慶、これに過ぎず候。天下の幸福は富貴、壽徳と申し候に、老臺は、四福を、一家に蒐められ候こと、羨望に禁へず候。今回、令息、中學卒業の期近づき候に

就いては、後年の方向、如何にすべきかとの御垂問、正に、領承致し候。小生は、躊躇なく、造船家となられんこと然るべしと、御返事申し上げ候。小生つくづく、令息の人となり、に、注意致し來り候ところ、篤實にして、算數の才あり、頭腦明確にして、想像力にも乏しからず、而して、幹事の能に至りては、また、老臺に髣髴致し候。これ、實に、天生の大工業家に御座候。かくの如き人物を軍人、政治家、若しくは文士たらしむるは、經濟に取りて、誠に大損失と存じ候。但、大事業家となりて後、好むと

随つて
(随ひて)

ころに随つて、政治家たり、實業家たるは、何人も、異論なきことに候へども、そは、その人の道樂と見て、今は、唯、造船科を修めしめらるること、最も適當と存じ候。御承知の如く、我が國今後の海軍擴張は、年年に、歩を進むべく、商船の建造も、これに伴ふべく、随つて、必要なるものは、造船家に候へども、この種の修養あるもの、一向に少く、今、なほ、艦船は、多く、外國に、註文致し居り候次第、若し、令息にして、この科を修められ候はば、國家の爲に、利益尠からぬことと存じ候。白馬、金鞍も、愉快

賊ふ。

スコットラ
ンド
大不列顛
島の北部
造船業盛
なり。
Scotland

に候へども、太平洋を、我が湖沼たらしむる大業を助くるは、更に、至大の愉快と存じ候。とにかくに、本人の材能如何が、第一の問題に候。令息のごとき好材能を、他に向くるは、天賦の才を賊ふものに外ならず、外間の群議を排して、速に、造船科を修めしめられんこと、切望に堪へず候。若し、これに決せられなば、やはり、スコットランド邊に、御遊學然るべく候はんか。これに就いては、種種の準備を要すべく候。近日、令息御遣し下され候はば、更に、委細、御相談仕らんと存じ候。

稽首。(竹越典三郎)

二五、農人形

往昔、繼體天皇が宣らせ給ひし、勸農の聖詔は、申すも畏きことながら、今も、なほ、貴き遺訓として、人人の仰ぎ奉る所なり。近くは、武門の治となるに及びても、諸侯の、農を重んじて、これを奨めたりし蹟の觀るべきもの、亦少からず。

水戸の常磐公園は、わが邦三公園の一と稱せらる。その、小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて、遠く、一

三公園
金澤の兼六園、岡山の後樂園、水戸の偕樂園。

勸農の聖詔
元年三月の詔に、「士有當年而不耕者、則天下或受其飢矣、女有當年而不績者、天下或受其寒矣。」

烈公
 徳川三家の一
 なる水戸家の
 主公。二四六
 〇年―二五二
 〇年）
 民と偕に樂
 む
 孟子に、「古之
 人、與レ民偕
 樂、故能樂也」



農 人 形

帶の郊野を、雙眸の中に收むることを得べし。園は、烈公徳川齊昭の創設せし所、名づけて、偕樂園といふ。蓋し、民と偕に樂むといふ義に取れり。されば、常に、士民の來り遊ぶにまかせ、花陰、行厨を披きて、一日の歡娛を竭さしめ、月下、瓢を傾けて、一夕の清遊を縦にせしめしといふ。公園には、今も、なほ、素焼の人形を鬻げり。その形や、結髮の老農が、積藁の側に跪坐して、笠を、その前に置ける狀に取る。製法、極めて粗なりと雖も、亦、頗る、

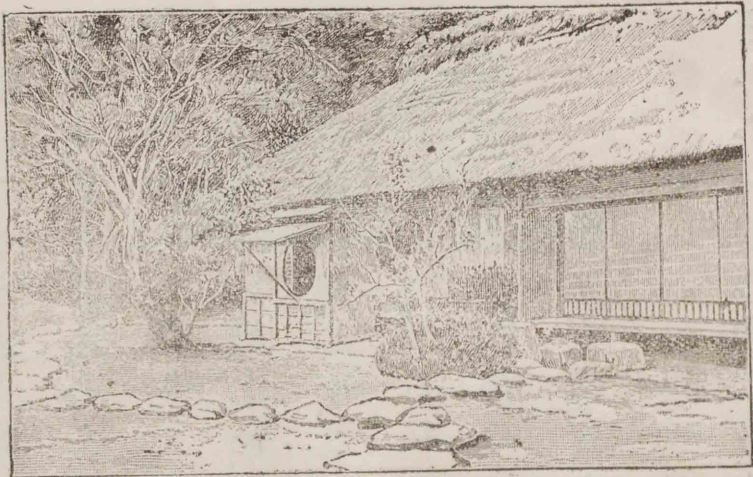
小亭
 好文亭とい
 ふ。

雅致に富めり。世人呼んで、これを、烈公の農人形といふ。齊昭、居常、深く、心を、農事に致して、屢、偕樂園中の小亭に登臨して、親しく、稼穡の勞苦を察しき。嘗て、銅を以て、農人形を鑄しめ、常に、これを、座右に置けり。その、食膳に向ふや、必ず、まづ、初穂の意を以て、一箸の飯粒を、これに供へ、然る後に食するを例とせりといふ。或時のことなりき、齊昭は、

朝な朝な、飯食ふごとに、忘れじな、

恵まぬ民に、恵まるる身を。

といふ一首の和歌を、侍臣に與へていへらく、古より、



西 山 莊

「賢君は、民を見ること、猶慈母の、赤子におけるがごとし」といへり。されど、われは、少し、これに異なりて、百姓をば、わが乳母なりと思ふ。われは、百姓に向ひて、何等の憐を施さざれど、百姓は、わが爲に、命を繋ぐべき物を與へぬ。その恩や、乳母と、何の擇ぶ所かあらんと。爾

來、侍臣等は、この農人形を呼びて、御百姓と呼ぶに至れりとぞ。今齧ぐところの農人形は、蓋し、これを模造したるものなり。古人の意を、勸農に用ゐたりし、また懇なりと謂ふべし。

齊昭の祖先なる義公德川光圀も、亦嘗て、菟裘の地を、太田の郷西山といふところに擇びぬ。地は、水戸を距ること、數里にあり。かの、わが邦第一の大著作とせらるる大日本史は、實に、公の監修せられけるものなり。公は、又、暇ある毎に、農民を、茲に引見して、親しく、農事を談ぜられけりといふ。庵を西山莊と稱し、庭前に、

光圀
家康の孫にして、文武の英雄。
主。二二八八年—二三六〇年。
菟裘の地
致仕隱居の地をいふ。左傳隱公十一年に「使營菟裘、吾將老焉。」

心字の池あり。池を隔てて、谷あり、山あり。春秋の觀賞、
兩つながら好し。名づけて櫻が谷、觀月山といふ。室は、
廣さ、十數人を容るるに過ぎず。殊に、書院との間に、全
く、その闕を撤したるは、貴賤の別を離れて、親しく、農
民等と、談話を交へんとする意に出でたりと聞く。齊
昭の精神は、多く、光圀より得來る。その意を、農事に用
ゐるも、亦、前後相承けたりと謂ふべし。(田園都市)

二六、宇宙の富

家は十坪に過ぎず、庭は、唯三坪。誰かいふ、狭くして、

かつ陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容るべく、庭狭し
と雖も、仰いで、碧空を望むべく、歩して、永遠を思ふに
足る。

神の月日は、ここにも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰、
かはるがはる到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來
りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩、また吟ず。しづかに觀
ずれば、宇宙の富は、殆ど、三坪の庭に溢るるを覺ゆる
なり。

庭に、一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白
き花開いて、樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空

より、白き花、ちらちらと舞ひて、一庭、須臾に、雪を散す。
鄰家に、花樹おほし。風に隨ひて、飛花、わが庭に落つ。
紅雨霏霏、白雪紛紛、見るがうちに、滿庭、花の衣を著く。
仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花、瓣あり、
山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に、一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき
花を開く。主も、妻も無口なれば、この花の、わが家に開
くほうべなりけり。

老李の背後に、一株の碧梧あり。その幹亭亭として、
すこしの曲なく、わが如く直かれと教ふるに似たり。

これと、手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うして、わ
が家の雨聲を多からしむ。李熟して、白粉ふきたる琥
珀玉の、ころころと、地に落つる頃は、與へて喜ばせん
男の子、一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつくぼうしの聲に、世は、いつしか、秋に入りて、
山茶花咲き、三尺ばかりの楓も、紅に燃えいで、ただ一
株、前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲きいづ。名苑の
花美しといふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は、却つて、わ
が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁ならば、獨憐細菊近
荊扉とや吟ぜん。恥づらくは、海内文章落布衣と唱す

蛻巖
梁田氏。明石
藩の儒者。(二
三三二年—二
四一七年)

獨憐細菊云

蛇巖の九月九日の詩に「琪樹連雲秋色飛、獨憐細菊近荆扉、登高能賦今誰是、海內文章落布衣。」

べき身にあらざること。

屋後に、一株の銀杏あり。秋深くしては、滿樹、黄金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩翩として、翻り落つ。半夜、夢さめて、雨かと疑ひ、曉に起きて、戸を開けば、庭は、一夜に、金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として、落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と、人はいふなる錦を、我は、庭に敷きつめぬ。

木の葉落ち盡しては、流石に寂しげなれども、日影、月影、いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに、障なきは嬉し。(徳富蘆花―自然と人生)

Tunguses ッ
ングース

二七、 滿洲の風俗

滿洲人は、人種學上、ツングース民族に屬して、所謂女真人なり。彼等は、固有の滿洲語を話し、また、固有の風俗習慣を守りて、支那人と同じからず。然るに、一度、明を征服してより、却つて、次第に支那化せられ、今や、その固有の言語をさへ失へり。然れども、その風習には、なほ、滿洲人として見るべきものあり。殊に、その著きは、婦人の風俗にして、有夫の婦人は、頭を、日本の徳川時代の奥女中の如き鬘に結び、長き笄を挿し、耳に

は、耳輪を下げ、娘は辮髪にて、いづれも、長き服を著、大



満洲の風俗

きなる足を有せり。子供は、搖籃に納れて、これを育つ。その搖籃は、革の紐を以て、家の梁に吊り、母親、これを搖り動して睡らするなり。搖籃は赤塗にて、その上に、弓と、矢筒に入れたる矢とを描けり。

この繪は、滿洲人が、弓矢に依りて生活したることを示すものにして、彼等の士風の盛なりしことを想像するに足る。

滿洲人の、普通の家は、草葺の木造にて、その周圍を垣にて圍み、入口に、鳥居に似たる門を作り、そこに、神杆と稱する、一本の棒を立つ。これは、神を祀る意味にして、滿洲人の、古き風習なり。また、滿洲人の容貌は、長き顔多く、頭形は廣く、身長は、支那人に比すれば、あまり高からねど、蒙古人に比較すれば、少し高し。彼等は、體質上、種種の點に於いて、朝鮮人に似たる所あり。

大きなる車を、馬や牛に曳かせて、上より、鞭を以て、これを追ひ行くは、滿洲人固有の風俗なり。百姓は、牛の皮の靴を穿く。形狀は、我が大和、河内邊の百姓の用ゐる皮靴と同じき物なり。又、高粱を以て、酒を造る、大きなる酒屋あり。その看板に、紅色の布を垂れたるは、滿洲の冬の、寂しき枯野の色と、面白き對照をなせり。夏來れば、これ等の地方は、悉く、高粱を作れる畑となり、日本の竹藪の間を歩くが如き感あり。又、春より秋へかけて、遼河の凍結せざる間は、長蛇の如く、左右にうねれる、その下流を、アンペラをかけたる船の、大豆

遼河

内蒙古の長白山に發源し、遼東灣に注ぐ

アンペラ

一種の筵。

などを積みて上下する有様、實に、何とも形狀し難き珍しき光景にして、最もよく、滿洲の氣分を漂せり。百姓は、いづれも大農にして、その畑の廣きことは、實に驚くべき程なり。土地は平坦にて、河岸や、村落やには、所所に、楊柳、又は榆の木を立てるがあれども、他は、全く、樹木なき廣野なり。土柔きゆゑ、牛馬などの往來する時は、土砂舞ひ揚りて、黃塵萬丈の觀を呈す。一旦、雨期となる時は、忽ち、泥濘の海と化して、路は、迹形もなくなり、車輪は、泥中に没して、進退を失ふ。高粱の茂る頃には、馬賊と稱する土匪、盛に、その間に出沒す。

全く、馬賊に、高粱は附物といふべきなり。(鳥居龍藏—蒙古及滿洲)

二八、蘇武 (坪内逍遙)

風颯颯のあきふけて、
日をかさねたる旅衣。
おもき君命いただきて、
遠く匈奴の國に入る。
野邊の草木や鳥のこゑ、
聞く物の音も見る色も、

蘇武
字は子卿。その匈奴に使せしは、漢の武帝の天漢元年にして、赦されて歸りしは、昭帝の始元六年にて、十九年間匈奴に在りき。

匈奴
フンヌ族。蒙古地方に住せし遊牧の民にして、漢の時代に、勢盛なき。

いづれか夷のものならぬ。
思へば遠く來つるかな。
ながれゆく水音たてて、
胸にうれへの波高し。
故郷母あり雁鳴きて、
老の寢覺やいかならん。
よしや幾夜の草枕、
旅寢の空にむすぶとも、
國家のために盡すべし。
君命おもく身は輕し。

かうと覺悟は定りぬ。
使命つぶさにとり傳へ、
匈奴の王に面接し、
國書をここに呈しけり。
もとより非道の王なれば、
國書の旨意は聽かざれど、
單身敵地につかひしつる、
蘇武が勇氣ををしみつ、
ある時蘇武を召しよせて、
「降り仕へよしかあらば、

おもく汝を用ゐんと、
説き諭せどもきかざれば、
國王おほいに怒をなし、
蘇武をとらへて荒山の、
いはやの中に幽閉し、
食を與へずくるしめぬ。
頃しも北風雪を吹き、
寒さ膚をつんざきぬ。
飢うれば枯草を雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。

飢うれば

日數經れども死せざれば、
 えびすら怪み且おそれ、
 このたびは蘇武を野に移し、
 羊の群をまもらせて、
 「雄羊はらむことあらば、
 放免せん」とあざけりぬ。
 覺悟はしても無念さに、
 眠られぬ夜も幾度か。
 一夜雲なく月すみて、
 あきも最中の空のいろ。

聞え。

せめてはかくて在ることをと、
 雁に託しつ筆のあと。
 かくて春去り夏きたり、
 また秋の風冬の霜、
 落葉落葉のかさなりて、
 十有九年ゆめの間や。
 老いて屈せぬ忠節を、
 天助けてか不思議にも、
 雁の使のかひありて、
 楽しきたよりぞ聞えける。

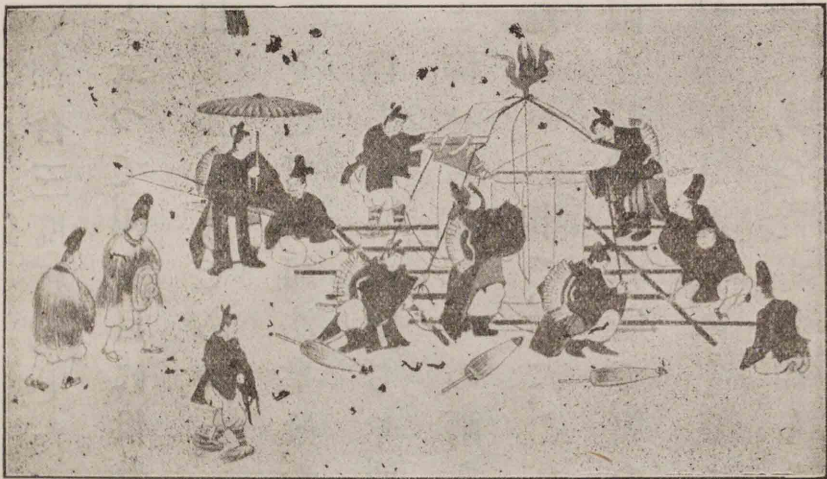
國と國との和議なりて、
蘇武は赦され歸れるが、
立ち出でし時の黒髪は、
いつしか雪とぞなれりける。

二九、大宮人と武士その一

雨を、歴史上から見ると、種種面白い事があるもので、雨を恐れると恐れぬとが、その時代の世態、人情を表してゐるやうに思はれる。

白河天皇が、御位を、堀河天皇に御譲りになつた後、

一切經
佛典の總名。
大藏經ともいふ。
白河
京都の東部地方の稱。
法勝寺
天台宗。白河天皇の創建にて、洛東にありき。



風 輩 (雨) 儀

佛法御信仰の餘に、一切經を、紺紙に、金泥でお寫させになつて、それが出來上つた時、白河の法勝寺で、供養をされる豫定であつた。所が、その日になつて、大雨である爲に延期せられ、更に又、期日を定めたが、この時も、亦雨だ。次に延期した日も、また雨で、行幸が出來な

い。都合三度延期したが、もはやこの上延期はできぬと云つて、四度目に供養を行はせられたが、生憎その日も、亦雨天であつた。

そこで、白河法皇は、大いに逆鱗ましまして、怪しからぬ雨ぢや。速に、監獄へ送れ。と仰せられて、その雨を、器物に入れて、獄舎へ送られたといふ事で、世に、これを、雨禁獄といひ傳へてゐる。雨を禁獄した所で、何の效もあるまいが、かくまで、逆鱗遊ばされたのを見ても、御外出の時、雨が、如何に禁物であつたかが知られる。

逆鱗
天子の憤らせ給ふにいふ。韓非子に、龍之爲蟲也、柔則可三狎而騎也。然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者、則必殺之。人主亦有逆鱗也。

外出の時は、晴天がよいといふのは、普通の人情であるが、昔の人の雨天嫌は、又、特別であつたので、今の人々の想像も出来ぬ程恐れたものである。今一つの面白い例を、次に挙げよう。

建久六年の三月、奈良に、大佛殿の供養があつた。これは、聖武天皇の御建立遊ばされた大佛殿が、先年、平重衡の南都征代の時に、兵火に罹つて焼失して、大佛の首も焼け落ちたといふ騒、その後、再建も出来なかつたのを、後鳥羽天皇の思召、又、源頼朝の寄附や、俊乗坊重源などの勸化で、やつと、この度、再建落成した。こ

大佛殿
聖武天皇建立の金銅盧遮那佛を安置せる殿堂。
先年
治承四年十二月なり。
平重衡
清盛の子。一の谷の戦に、義經の軍に捕へられ、後木津川に斬らる。(一八一六—一八四五年)

俊乗坊重源
法然上人源空
の高弟。一一
八六五年

慈圓僧正
天台座主。文
を好み、和歌
に長ず。慈鎮
と諡す。(一八
一五年—一八
八五年)

れによつて、天皇も、行幸あり、頼朝も、鎌倉から上つて
來て、供養に參列したのである。然る所、この供養の日
が大風雨であつて、參列の公卿、百官、さては、諸寺の僧
侶たちも、非常に困り切つてゐた。

然るに、頼朝護衛の武士達は、その大雨の中を、びく
ともせず、列を正して密集してゐて、どこを、雨が降る
かといふ面魂、平氣なものであつた。そこで、京の人達
は驚くまいものか、時の名僧慈圓僧正などは、その事
を、記録に書きとどめて、武士達は、皆、雨に濡れること
を、何とも思はぬらしい」と、不思議さうに記してゐる。



鎌倉武士

兵士が、雨中を歩行くこと
や、立つてゐることが、何の
不思議であらう。ことに、鎌
倉武士は、當時、日本一のや
うにいはれた武勇の士で、
矢石の間をくぐつた者だ。
雨中に立つぐらゐるは、何で
もない。當然な話ではない
か。然るに、京都人は、かくの
ごとく驚く。これは何故で

あらう。

三〇、大宮人と武士その二

この疑問を解決するには、種種な方面から説明することが出来るが、一例を挙げれば、當時の貴顯紳士の服装が第一、雨に堪へないのである。裁縫の仕方は、暫く別としても、その地質は、大抵糊で張つて、艶を出したものが多いから、一度、雨に逢へば、忽ち、だらりとする。折目正しい禮服も、忽ち、見る影がなくなる。また、その染色も、水に濡れると、忽ち、色がさめるし、外へ移

りもするから堪らない。朝廷の大小禮は、大極殿や、紫宸殿で行はれたが、その時、天皇は殿上に、文武百官は、階下の廣庭に列立する。廣庭は青天井で、日覆もなければ、雨覆もないから、雨の日には、衣冠は、形なしになる。それ故、畧式で濟ませる。こんな事情が續いて、次第に、晴天でも、畧式を用ゐ、遂には、朝儀も舉行しないやうになつた。

然し、これは、只、服装の一例を挙げたに過ぎぬが、かかる慣習が、代代續いて來て、雨に臆するから、身體も、虚弱になれば、氣性も、柔弱になる。随つて、活動する事

などは思ひも寄らぬやうになる。上流社會が、この通であるから、上に倣ふ下で、下級の人民も、段段、勤勉が出来なくなる。國は衰ふるのみである。

雨を恐れる所に、亡國の氣分が漂ひ、雨の降るのも知らぬ風に、びくともしない所に、新興の活氣が漲つてゐるではないか。これ、即ち、平安時代の末に、朝權が、日に衰へて、武家政治が、新に興つた所以である。もし、殿上の公達も、雨に恐れなくて、活潑に活動してゐたならば、政治の實權を、武士に握られるやうな事になかつたかも知れないのである。(萩野由之―讀史の趣味に

漲つて
(漲りて)

よる

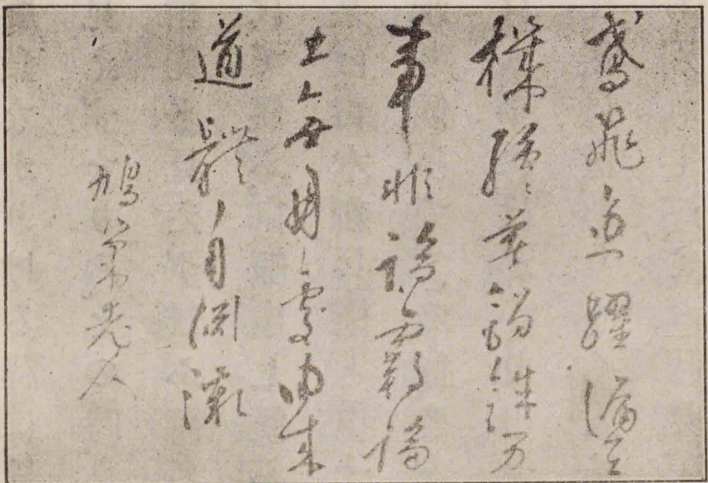
三一、殊勝なる武者振

徳川秀康 家康の第二子、越前の藩祖。(二二三四年―二二六七年)
徳川秀康卿、越前に封ぜられ給へる後、阿閉掃部とて、武功のほまれありし者を、厚祿にて、召し抱へられけり。また、狛伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴歴なりけるが、嫡子に、鎧の著初せさするに、かの掃部を請待して、子に、鎧を著することを頼みけり。さて、饗膳いでて、祝の盃に及べる時、伊勢、今日は、愚息が、鎧の著初にて候ふまま、御身の御武功の事、御物語り候ひて、かれ

志津が嶽の戦
天正十一年四月、羽柴秀吉と柴田勝家との戦。志津が嶽は、伊香郡にあり。
余吾の湖
志津が嶽の麓にあり。

に御聞かせ候へ」といひけるに、掃部、いや、某が身の上
に、御話し申すべき程の武功も覚え申さず候ふ。され
ど、御望黙し難く候ふまま、某、一生の内に、武者振の見
事なる士を、一人見申して候ふ。その事を御話し申す
べし。江州志津が嶽の戦に、暮方に、某一騎、余吾の湖の
あたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより、
詞をかけける故、馬を引き返し候へば、その人申し候
ふは、今朝よりかせぎ候へども、好き敵にあひ申さず
候ふ。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。御不足なが
ら、御相手になり申すべし」とて、進み寄り候ふ故、それ

こそ、こなたも望む所にて候へ」と、互に、馬を乗り放ち、



室鳩巢集筆蹟

既に、槍を合はせんとしけるに、その人、しばし御待ち候へ。今朝より、雑兵を、多く突き崩し候ふ故、槍よごれ候ふまま、槍を洗ひ候ひて、御相手になり候はんとて、余吾の湖に、槍をうち浸し、二三遍洗ひて、さらばとて、突き合ひけるが、久しく、

勝負なかりける程に、日も暮れ果てて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより、又、詞をかけ、もはや、槍先も見えず候ふ。御名残多くは候へども、これまでにて候ふ。御暇申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ。某は、青木新兵衛と申す者にて候ふ」とて、某が名をも承り候ひて、「この後、また、陣頭にて出で合ひ候はば、互に、人手にはかかり申すまじく候ふ。もし、また、身方にて候はば、わりなく、入魂致し候ふべし。さらば」とて、立ち別れしが、これ程見事なる武士は、遂に見侍らず。いかか成り果て候ふにか」と語りけるに、その頃、伊勢が

をどし(緘)

許に、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たるが、この物語を聞きて、躁り出でて、掃部に向ひ、さても、只今の御物語承り、今更、昔を思ひ、涙を落して候ふ。その時の御相手になり候ひし青木新兵衛は、恥しながら、我等にて候ふ。かく申すばかりにては、浮きたる事に思すべく候はん」とて、その時の雙方の鎧の緘、馬の毛色を、一一いひけるが、一つも違はざりければ、掃部愕きて、さては、久しくて逢ひ候ひて、本望に候ふ」とて、手前にありたる盃を、方齋にさし、「これをするし」とて、腰なる脇指を抽きて、引

きけり。それより、方齋が名國に高くなりける程に、遂に、秀康卿の耳にも達しければ、掃部と同じ祿にて、召し出されたりき。(室鳩巢一駿臺雜話)

三二、膽力の養成

男子と生まれた以上は、死生の境に出入しても、從容自若として、更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃、眼前に閃き、危岩、頭上に崩れかかつても、悠然としてすましてゐるが、膽力のないものは、天井から、鼠の糞が落ちてても、膽を

冷し色を失ふではないか。

膽力は、その人の天稟にもよるが、また、決して、修養せられぬものではない。上杉謙信が、十四五歳の時、大敵に追はれて、門番所の板敷の下に、潜伏しながら眠つて居たとか、徳川光圀が、六歳の時、暗夜に、刑場に往つて、死人の首を取つて來たとか、ネルソンが、幼時から、恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆、天稟と見るべきものであるが、修養で、剛膽の人となつた例も、亦、決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衛門といふ、名代

の卑怯者があつた。信玄は、どうかして矯正しようとして考へて、或日の戦に、彼を、掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢丸は、雨のやうに飛んで來る、砲聲は、雷のやうに轟く。彼は、その怖しさに、殆ど、死人のやうになつてしまつた。しかし、幸にも、一つも、矢丸が中らなかつた。そこで、彼は、翻然として、運さへあれば、矢丸も中らない、死は、決して、畏るべきものでないと悟つて、それから、戦争毎に勇み戦つて、遂に、武名を揚げたといふことである。

大藏左衛門が、戦を恐れたのは、彈丸雨飛の危険を

戦つて
(戦ひて)

過大視したからである。危険災害の身に迫つた時、直に、その結果を、過大に豫想して、恐懼狼狽するのは、神經質な人ほど、あり勝のことである。ところが、平素、修養あり、經驗あるものは、決して、恐懼狼狽することは、ない。消防夫が、炎炎と燃えあがる猛火の中に、泰然として立つのも、水夫が、狂瀾怒濤の間に、自由に働くのも、皆、鍛鍊と經驗とに依つて得た、自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく、多くの鍛鍊と經驗とを積むことは、膽力養成の、有力の方法である。

其次には、あきらめるといふことが必要である。危険

災害等の來る場合に、なるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には、相違ないが、それが爲に、却つて、怯懦に陥ることがあるものである。最もわるい結果を、身に引き受けても、是非に及ばぬと覺悟すると、膽は、自然に、すわるものである。例へば、眞劍勝負をする場合に、まづ、身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて、敵の命を取るといふ風に、死身になつた上で、手段と伎倆とを盡す方が、命を惜む者よりも、自由が利くから、自然數倍の働をすることが出来る。

富んだ人
(富みたる人)

勝海舟は、膽力に富んだ人で、白刃を踏みながら、談

笑の間に、天下の大事を決した英傑であるが、自ら、その膽力を、禪學と劍術とに依つて養成したものと信じて、左の如く語つて居る。

自分は、殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業したが、徳川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に、一命を全うしたのは、全く、この二つの功であつた。度度、刺客かなんかに脅されたが、何時も、手取にした。この勇氣と膽力とは、畢竟、この二つに養はれたのだ。危険に際會して、逃げられぬ場合には、まづ、身を捨ててかかつた。さうして、不思議にも、死なな

かつた。ここに、精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち、頭熱し、胸跳り、措置顛倒し、進退、度を失するやうな患が生ずる。又、遁げて、防禦の位置に立たうとすると、忽ち、畏縮の氣が生じて、相手に乗ぜられる。大小の事、皆、この規則に支配せられるのだ。自分は、これら、精神上の作用を悟つて、何時も、まづ、勝敗の念を、度外に措いて、虚心坦懷で、事變に處した。それで、小にしては刺客、亂暴人の厄を免れ、大にしては、瓦解前後の難局に處して、綽綽餘裕あることが出來た。

と。海舟は、主として、劍術と禪學とで、膽力を鍊磨したのである。理窟の上から、膽力を養成することは容易でないが、實地の修業において、膽力の鍊磨せられることは、殆ど、人の想像以上である。(嘉納治五郎—青年修養訓)

三三、人の諫

本多正信、或時、嫡男上野介に語りけるは、昔、大殿、濱松の城にましましし時、ある夜、外様の侍三人、御前に召されて、仰を蒙ることありて、罷り出づ。その中に、一人止りて、懷より、一封の書を取り出し、自ら、封を切り

本多正信
三河の人、家
康の謀臣。(二
一九八年—二
二七六年)
上野介
名は正純。(二
二二五年—二
二九七年)
大殿
家康をいふ。
濱松の城
遠江國濱名
郡。

て奉る。それは何ぞ」と仰せらるるに、これは、某年ごろ、諫め奉らんと存ずる所を書き列ねたるものにて候ふ。よき序なれば奉る所なり」と申す。殊に御心地よげにて、それにて讀み候へ」と仰せらる。一條を讀み終るたび毎に、申す所ことわりにこそあれ」と仰ありて、十餘條を讀み終へて後、我を諫めんこと、この度に限るべからず。この後も、思ふ所あらんには、憚る所あるべからず。汝が志のほど、神妙の至なり」と感じ仰せ下さるるに、彼の人、悦に堪へずして罷り出づ。正信、御前に在りけるに、唯今の申し條、いかに聞きつるぞ」と仰あ

り。事、皆細碎にして、國家の大務にあらず。殿の用ゐさせ給はんこと、一條もなしと承り候ひぬ」と申すに、御手を振らせ給ひて、いやいや、彼が、智を竭して、思ひ謀れる所なり。その智の拙きは、如何にせん。彼が、年頃、時を得て、我を諫めんと思へることこそありがたけれ。世の人、自ら、我が過を知ること多からず。過と知りなば、誰か過つべき。善しと思ひ誤るより、過はあるなり。卑しき人は、親族、朋友、互に諫め争ふこともあれば、過をも知りて改めつ。これ、卑しきが、一つの益なり。位貴き者には、親族も、交疎く、まして、朋友といふものもあ

悔ゆ。

らず、朝夕日夜、我が前に伺候する者、如何にもして、主の心に逆はざらんことをこそ思ひはかれ、いかで、その過を正さんと思ふの暇あらんや。たとひ、稀有にして諫めんと思ふ者ありとも、その過の大いならんことをこそいほめ、少しのことならんには、さて止みなん。凡は、少しなるが積りてこそ、大いなる過にもなれ。過、既に、大いなるに至りては、いかに悔ゆとも及び難きこともあるなり。されば、我が聽く程のこと、皆、耳に逆ふことなく、一生、我に、過ありといふことを知らで過ぎぬ。これ、高きが一つの損なり。古より、家を滅し、國

を失ふも、皆、諫を聞くことなく、我が過を知らざるが故に、あらずや。このことを思ふに、たとひ、いかなる僻事ならんにも、我を諫むることならんには、皆、忠言とこそ思ふべけれ」と仰ありき。あり難き御心なりけり」と、頻に、涙を流して語りけるに、正純聞きて、その人は誰なるらん。又、いかなる事をか申しけん」といふ。正信聞きて、氣色損じ、その申しし事も、その人をも、汝が聞きて、何の益かあるべき」と答へしとなり。この問答にて、父子の相遠きこと、量り知るべきにや。(新井白石)

藩翰譜

三四、大森閑語

一、

折ふし、友の訪ひ來るあれども、大森の僑居地僻にして、これに饗すべきものなし。乃ち、時に、滿庭の落葉を集めて、藪を焼く。白煙、黒煙、高く渦き上り、猛火、風に煽られて、飈飈の聲を發するところ、枯枝を取つて、熱灰を探れば、累累として、藪既に柔なり。いまだ味はざるに、これを圍むもの、皆破顔一笑す。

落葉かいて、君と小藪を、焼かんかな。

大森
武藏國荏原郡
にあり。東京
より一里餘。

二、

行ふの意なきことは、公に、これをいふ。行ふの意あることは、祕して、これを言はず。吾、一たび、既に、これを行はば、いはずと雖も、人、自ら、竟に、これを知らん。知らば、則ち、これをいふの要なければなり。

三、

飢ゑずんば食はず、渴せずんば飲まず、思はずんば行はず、信ぜずんば語らず、憤らずんば打たず、悲しからずんば泣かず、をかしからずんば笑はず。我は、我が性に従ふを知る、人の性を迎ふるを知らず。

四、

自轉車に乗りて、急阪を下るに、如何にしても、これを止め得ざるに至ることあり。かかる場合に、強ひて、これを止めんとする法、唯一つ。曰はく、舵機を棄つるあるのみ。

一たび舵機を棄つる時は、車、方針を失して、久しからずして顛倒すべし。これ、實に、死地を活すの法なりと、さる人の語りき。

五、

自然薯の、土深く食ひ入りて、たやすくは出でず、そ

の味の、最もうまき時、葉落ち、莖枯れて、その所をだに顯はさざる、さながら、自ら、世を晦して隠れたる古聖人の風あり。しかも、進歩は、人の知らざる地底に行はれて、寸一寸、緩やかに延びゆくさま、學ぶに足らずとせんや。(杉村楚人冠一へちまのかは)

新定中等國語讀本卷三終

山陽中李校

第二季年

朝校

Sanyo middle
school
Fukuoka
Japan
North-west